

JOURNAL

東京迂回路研究

1

多様性と境界に関する対話と表現の研究所 × 東京アートポイント計画

東京迂回路研究

撮影 ● 齋藤陽道











千葉県木更津市にある宅老所「井戸端げんき」へ、写真家の齋藤陽道さんと再訪したのは2014年の12月。11月に「もやもやフィールドワーク 調査編」としてお伺いしたときの、その人がその人としている姿を許し、ただ共にいる、という、ふるまいの空間が、忘れられなかった。

それは、まだ見ぬ「迂回路」をさぐり続けた私たちの道のりを象徴しているようであり、しかし一方で私たちの道のりを圧倒的に凌駕していた。

気鋭の写真家であり、居場所をつくることに興味を寄せている齋藤さんの目線には、この場はどのように映るだろうか。そう期待し、宿泊までお願いし、撮影していただいた2日間。身振りで、文字で、写真で、齋藤さんもまた、ただ、共にいた。

終わった後、齋藤さんは、Twitterでつぶやいていた。

「パラダイスに入ったきもちがしたよ。
想像はるかにこえて、すごくおおらかなところだ」――

迂回路を、さぐる。東京迂回路研究。

井戸端げんき

千葉県木更津市にある宅老所。2002年より、民家を利用した、地域密着型の通所介護事業所として運営。利用する人、一人ひとりの暮らしを大切に、その家族、スタッフ、ボランティア等が、楽しさを分かち合えるような関係を目指している。井戸端げんきを必要としている人であれば「いつでも誰でも受け入れる」場所。

齋藤陽道 さいとう はるみち

1983年東京都生まれ。石神井ろう学校卒業。2010年第33回キヤノン写真新世紀優秀賞受賞。その人がその人であることや、途方もない日常のなかの普通に劇的なことを捉えるように撮影をしている。主な個展に『宝箱』（2014年、ワタリウム美術館）、写真集に『感動』（2011年、赤々舎）、『宝箱』（2014年、びあ）など。最新作に『写訳 春と修羅』（2015年、ナナロク社）。

目 次

03	東京迂回路研究 撮影/齋藤陽道
10	はじめに
12	研究デザイン 「迂回路」をさぐる方法——「対話型実践研究」にたどり着くまで 三宅博子、井尻貴子、長津結一郎
20	事例研究 もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編
20	論考01 「境界」とそこにある表現——精神障害と表現をめぐる2つの実践から/長津結一郎
30	コラム01 精神障害者を巡る個—集団—社会関係のほんのさわり/戸島大樹
32	論考02 「家族」の多様性と境界——乳児院とLGBTの里親支援の現場から/三宅博子
42	コラム02 「多様性と境界」、そして「迂回路」——LGBT里親の壁/藤めぐみ
44	論考03 「場」をめぐる「境界」——2つの居場所から見えるもの/長津結一郎、三宅博子
54	コラム03 ひとりぼっちたちの居場所/加藤正裕
56	エッセイ トークシリーズ「迂回路をさぐる」から/井尻貴子
60	あとがき
62	巻末資料 「東京迂回路研究」平成26年度実施事業

附録 「東京迂回路会議——多様性と境界をめぐる」録

66	共有空間の開発——小っちゃな火を囲むプロジェクト、対話工房などから/小山田徹
68	暴力のあとを共に生きるために——out of frameのささやかな試み/坂上香
70	場を作る——カブカブの実践を通して/鈴木励滋
74	ディスカッション 「多様性と境界をめぐる」

はじめに

多 様 性 と 境 界 に 関 す る 対 話 と 表 現 の 研 究 所

特定非営利活動法人「多様性と境界に関する対話と表現の研究所」。この、何とも重厚長大な、それでいてどこか訝しさを感ぜずにはいられない名前を名乗りはじめて、もう1年になろうとしている。今年度、この研究所の立ち上げとともに、東京都及び東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）との共催事業として、「東京迂回路研究」というプロジェクトを実施してきた。そのなかで、研究所の名称を幾度となく名乗るたび、ときに驚かれ、ときに聞き返され、ときに戸惑いを生んできた。だが印象的だったのは、特にケアやコミュニティに関する活動を行っている人々や、本書で紹介する調査先の人々の多くは、この名称が名指そうとする、ある問題領域の存在を、大きな共感とともに受けとめ、応答してくれたことだ。まさに、この名称こそがプロジェクトの重要な一部分を表していることを、私たちは名乗るたびに考えさせられてきた。

とはいえ、この研究所の名前は、あまりにも長い。そこで何か愛称を、と考えあぐねて掘り起されたのが、「diver-sion」という言葉だった。「多様性」を意味する“diversity”と、「境界」を意味する“division”。二つの言葉を掛け合わせた、だじやれのつもりだった。試しにスマートフォンの辞書でこの言葉を検索してみると、なんと“diversion”とは「迂回路」という意味を持つ言葉であることがわかった。「多様性」と「境界」の問題を紐解くと、そこには「迂回路」が埋め込まれていたのである。だじやれは別々の言葉をつなげることで生まれるパワーを楽しむものであるが、この必然とも言える偶然に私たちは大きな可能性を感じたのだった。

研究員となったる名はこれまで、それぞれの立場から「障害」と「アート」に関する実践や研究に携わってきた。長津は、東京藝術大学大学院音楽文化学分野芸術環境創造領域で、主に障害のある人の表現活動に携わりながら、芸術と社会包摂、地域コミュニティの生成と芸術活動の関わりについて研究してきた。井尻は、エイブル・アート・ジャパン、一般財団法人たんぼの家等で、障害のある人の芸術文化活動支援を行うかたわら、大阪大学大学院文学研究科で臨床哲学を専攻し、その場に集まった人々とともに対話を積み重ねてじっくり考える「哲学カフェ」の実践を行ってきた。三宅は、音楽療法士として病や障害のある人との音楽活動を行いながら、神戸大学大学院総合人間科学研究科で、音楽療法にひそむ権力性の問題と、生の表現のあり方について考えてきた。

そこには、共通の問題意識があった。現在「障害」と「アート」をめぐるって起きている様々な事象や問いの核心は、「多様性」と「境界」の問題だ、ということである。

「障害」と「アート」をめぐる実践は、アール・ブリュット、アウトサイダー・アート、エイブル・アート、あるいはアートセラピーなどのような呼称で扱われ、背景にある理念も多様だ。「障害者の純粋無垢

な表現」、「作者の生い立ちではなく、作品そのものを評価する」、「障害者芸術が持つ社会的なインパクト」、「芸術の治療的意義」……。それらの言説をていねいに読み解いていくと、そこに引かれている、障害／健常、芸術／非芸術、を分割する境界線が見えてくる。境界線のはたらきは、ある人間の営みを、ときには“障害”や“病”の表れとして治療の対象にしたり、“芸術”と称して評価したりする。誰が“障害者”で誰が“芸術家”なのか？ 誰が誰をそう見なすのか？ 誰にとっての、芸術的・治療的・社会的“価値”なのか……？

一方、私たちが暮らす現代社会では、ときに「私が私として生きていく」ことそのものに困難を抱えてしまうことがある。つねに多数派と少数派、常識と非常識は入れ替わり、重層的かつ複層的な境界線を、自他とともに引き続けながら生活している「私たち」。人々の多様な生のあり方を、誰がどのような観点からまなざすかによって、境界線は揺れ動き、ずれを生み、つなぎ変わってゆく。

「障害」と「アート」をめぐる問題、そして人々が抱える「生きづらさ」という問題。この、一見異なる2つの問題は、「多様性」と「境界」というキーワードを通して見たとき、社会で暮らす「私たち」が生きることと「表現」の問題として、響きあう。ならば、私たち3人は、人間の多様な生をめぐるって幾重にも引かれる境界線の前に立ち、問いを見据えることから始めようと考えた。なぜなら、その中心にある、人々の多様な生の営みのなかにこそ、これまで価値化されてこなかった、新しい表現の、新しい文化の萌芽があるのではないかと考えるからだ。

日常のなかで育まれている、人と人、また人と場との関わりや、関係の多重性と変容、さらには関わる人々の多様さに着目することで、多様な人々が社会のなかで共に生き抜くための技法のヒントが得られるのではないか。そして、現場から浮かび上がる問いを、様々な人々と共に「対話」し、共有することによって、「私たち」が、生きるなかで、言いようのないもどかしさややりきれなさ、つらさやしんどさなどを感じたとしても、それでも歩きぬくことの出来る「迂回路」を見出すことが出来るのではないか。その「迂回路」とは、決して単なる「回り道」や「劣った道」ではない。多様な存在が共に生き抜くために獲得した「もうひとつの道」である。その道にこそ、「私たち」が強いられて歩む生き方とは異なる、新しい社会、新しい暮らし、新しい創造性の種が埋め込まれているのではないだろうか。「対話」を通じてその道をたどることで、これからの社会を生き抜くための「表現」を見つけ出したい。

こうして、多様性と境界に関する対話と表現の研究所、そして「東京迂回路研究」は、新たな道への扉を開いた。本書はその第一歩である。

「迂回路」をさぐる方法

——「対話型実践研究」にたどり着くまで

三宅 博子、井尻 貴子、長津 結一郎

「東京迂回路研究」は、多様な立場の人々が社会のなかで共に生き抜くための「迂回路」を探求することによって、広く私たちの未来を形づくるためのヒントを得ることを目的とする、“研究”型アートプロジェクトである。本プロジェクトでは、その研究手法として「対話型実践研究」を掲げて取り組んできた。「対話型実践研究」は、すでに確立された既存の方法ではない。障害、ケア、労働、住処、ジェンダー・セクシュアリティ、都市と地方といった、「多様性」と「境界」をめぐる様々な現場から浮かび上がる問いを、今の社会に生きる「私たち」の問題として共有し、現場と現場、現場と非-現場をつなぎ、新たな芸術的・社会的文脈を創出するための方法論として、研究員の3名で試行錯誤しながら作ってきた枠組みである。ここでは、「対話型実践研究」としての本プロジェクトの概要、目指す方向性や姿勢、研究過程を通じて対話が成り立っていった経緯について述べる。

1 「東京迂回路研究」の研究デザイン

概要

「東京迂回路研究」は、平成26年度より開始した複数年にわたるプロジェクトである。初年度は、「迂回路をさぐる」をテーマとし、東京都内および近郊の訪問調査や対話型イベントの開催を通じて、病者、障害者、セクシュアル・マイノリティ、都内の周縁地域といった対象領域における人々の生の実態と表現の可能性をさぐることに重点を置いてきた。

2年目以降は、これまでの活動で出会ってきた人々や団体が相互に関係し合うプログラムを構築し、「迂回路をつなぐーひらく」ことを通じて、東京の「迂回路」をより多角的な視点で掘り起こしてゆく。また、多様な人々の生の実態から見出した表現の可能性を「生き抜くための技法」として抽出し、「迂回路」の一つのかたちとして提示することを目指している。

見取り図

「迂回路をさぐる」は、①もやもやフィールドワーク調査編・報告と対話編、②トークシリーズ「迂回路をさぐる」、③成果の発表と情報発信、という三つの柱からなる。研究デザインを図にしたものが、図1である。

各事業の詳細

- ①もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編
もやもやフィールドワークとは、a) 調査編、b) 報告と対話編、を一对として行う、実践研

究である。その構造に「対話」を含むことから、一連のもやもやフィールドワークを「対話型実践研究」の中心部分と位置づけた。調査先の一覧、報告と対話編のタイトルについては、巻末の資料を参照のこと。

a) 調査編 調査編では、東京都および近郊において、多様性と境界に関する対話と表現に関わる活動を行っていると思われる医療・福祉施設、ケアに関する団体や活動現場へ赴き、参与観察と関係者への聞き取りを行う。調査

図1 「東京迂回路研究」の研究デザイン



対象は、障害、ケア、労働、住居、ジェンダー・セクシュアリティ、都市と地方などを含む、なるべく幅広い対象領域から選定することを心がけた。平成26年6月～平成27年3月にかけて、8件の調査を実施した。

b) 報告と対話編 報告と対話編では、調査の報告とそれに基づいたテーマ設定による対話を行い、多様性と境界に関わる活動とそれをめぐる状況への考察を深める。各回のプログラムは、研究員による1時間の調査報告の後、参加者全員による対話を約1時間行う構成である。対話では、「哲学カフェ」と呼ばれる手法を用い、その場に集まった人たちが、進行役のもと、〈話すー聴く〉を丁寧に積み重ねてじっくり考える場をひらくことを意図した。平成26年6月～12月にかけて、計7回開催した（初回は、事業説明と対話のみ実施）。

調査編と、報告と対話編とを一對として行う意図は、先にも述べたように、現場と現場、あるいは現場と非-現場とを往還しながら、対話を行うことにある。これは、現場の参与観察から見出される問題を、広く社会に生きる「私たち」一人ひとりと関わり合う問いとして、報告と対話編で共有することによって、現場での営みと、現場に居合わせない人々の営みとをつなごうとする、双方向的・多方向的な試みである。同時に、現場の人々に対話という形でフィードバックを行うことも意図している。

このフィールドワークを「もやもや」と名付けた理由も、対話の双方向性・多方向性と関連している。ここでの問いは、それぞれの立場や状況によって見方が異なり、一つの答えを出すことが困難な問いである。調査の過程、報告編での問題提起、対話編で他の参加者の視点に触れることなどを通じて、自らの価値観を揺さぶられることを重視するとともに、多様な価値観が担保される場づくりを意識した。この「自らの価値観を揺さぶられる感覚」や「多様な価値観が一つの答えに収斂することなく、同時に一つの場に留まるありよう」を、「もやもや」の言葉に込めた。

②トークシリーズ「迂回路をさぐる」

トークシリーズ「迂回路をさぐる」とは、映画、ダンス、音楽、造形活動、雑誌編集など、アートの様々な手法を通じ、多様な現場で人と関わり合いながら活動を展開しているゲストのトークを中心とした、全7回のイベントである。本プロジェクトにおける「迂回路」の先行事例研究という位置づけで行った。このプログラムの特徴のひとつに、ゲストトークを主にしながらも、トークと質疑応答の時間を同様の長さに設定したことが挙げられる。質疑応答の時間を長くすることで、参加者の質問からトークがさらに展開していく可能性をひらき、参加者の関心がトーク内容に反映され、そこへさらに質問が重なるというような双方向的なやりとりが起こることを意識し

た。内容及び第7回の対話の様子については、本冊子収録の「エッセイ：トークシリーズ『迂回路をさぐる』から」を参照のこと。

③成果の発表と情報発信

一年間の活動の成果発表を、以下の通り行った。何らかのかたちで「対話」の構造を取り入れることと、イベント参加者や閲覧者に、広く問いをひらくことを意図した。

●「東京迂回路会議——多様性と境界をめぐって」

平成27年1月17日に開催したシンポジウムである。研究員による活動報告に加え、様々な対話や表現が生まれる場に関わるパネリストの事例紹介とパネルディスカッションを通じて論点を深め、生き抜くための「迂回路」とは何かを重層的に捉える機会となることを意識した。内容の詳細については、本冊子収録の「附録『東京迂回路会議』録」を参照のこと。

●ジャーナル「東京迂回路研究Ⅰ」

年1回発行する、「東京迂回路研究」のジャーナルである（本冊子）。「もやもやフィールドワーク」での知見を論考にまとめたものと、調査先の方によるコラムを一つの対とし、対話の往還を意図した。また、トークシリーズの参加者による対話をエッセイにまとめたものや、事業を通じて出会った施設の日常をおさめた写真も掲載し、様々な形態による多声的な紙面構成をこころがけた。

●WEBによる情報発信

「東京迂回路研究」のウェブサイトを立て、イベント会場に直接足を運べない方にも事業内容やその雰囲気伝えるため、1年を通し、もやもやフィールドワーク調査編・報告と対話編やトークシリーズ「迂回路をさぐる」の様子等をレポートした。

2 研究員の立場と態度

上記のような研究デザインのもと、プロジェクトを開始した研究員だったが、調査訪問先の選定や依頼といった調査の初期の段階で、さっそく問いに直面することとなった。依頼先から「あなたたちが一体何者で、何を調査して、どのように研究しようとしているのか、よくわからない」という指摘を受けたのだ。

「私たちは、誰として、誰に向けて“研究”しようとしているのか？　そもそも、ここでいう“研究”とは何を意味するのだろうか？」。研究員の3名は、“研究者”としての専門性、当事者性、ここでの“研究”の意味について、折に触れ話し合った。それに加えて、既存の研究の方法論や理念も参考にしながら、自らの立ち位置を確認してきた。このプロセスは、目の前の具体的な問題への対処方法を探ることであると同時に、本プロジェクトが志向する態度のようなものを培う過程であったと言えるだろう。ここで、現時点で見えてきたこ

とをまとめておきたい。

専門性

私たちが志向する“専門性”とは、ある事象に関する占有的な知を持って他者を測り、理解しようとするのではない。むしろ、自らが身に付けた既存の知識や経験という“専門性”の衣服を脱いで、他者と関わろうとする態度のことを指す。この点について念頭にあったのは、エスノグラフィーの理念や方法論である。文化人類学者の小田博志は、エスノグラフィーを「人びとが実際に生きている現場を理解するための方法論」¹と定義している。エスノグラフィーの営みを一言で言うならば、人々が生きている現場について、その経験の内側から理解し、現場から「問い」を発見し、その問いを媒介として、ある世界と別の世界との橋渡しをすることと捉えられるだろう。その過程では、自らが当たり前と思っていたことを相対化し、他者の視点を介して自らを省みる「自己省察 (self-reflection)」²が起こってくるという。この、「他者の声を聴き (= 他者の声を受け入れ)」³、自らを問い直すという歓待の態度こそ、「対話型実践研究」において目指される“専門性”のあり方である。そこでの“研究者”の立ち位置は、「自己の世界でも他者の世界でもなくて、その『あいだ』」⁴である。「あいだ」の世界に身を置いて、自らの内にある境界線を揺さぶられることから、私たちの“専門性”が始まるのだ。

当事者性

「対話的实践研究」における当事者性は、どのように捉えられるだろうか。調査先の現場の人々が、ある実践や問題の“当事者”であるとするならば、私たち研究員は、それと同じ意味での“当事者”というわけではない。しかし、現場から見出された問いを自分自身の生活や人生に照らして、広く「私たち」が生きていることに関わる問題として主体的に考えてみる時、置かれた状況や立場をこえた関係性の拡がりのなかで当事者性を捉えることが可能になる。いわば“関わることとしての当事者性”である。

この点について、北海道の浦河べてるの家で始められ、近年広がりを見せる「当事者研究」の実践と、そこでの当事者性の捉え方が参考になる。一言で言えば当事者研究は、障害や問題を抱える当事者自身が自らの問題に向き合い、仲間と共に研究することを指す⁵。ここでは、個人の体験を固有のものとして語ると同時に、他者の体験とのすり合わせを行い、体験の共通性や普遍性の把握を目指す。べてるの家の当事者研究の重要な理念のひとつである「自分自身で、共に」が端的に示すように、研究とは、その内容が個人を越えた意味を持つ、共同的な行為なのである。

さらに、当事者研究の営みは、“健常者”を含めた他者との対話にひらかれたものである。当事者が、体験を共有しない者へと語り出すことにより、互いの感覚の差異を起点に自己

を振り返ることを通じて、自他の体験が地続きであることが明らかにされる。哲学者の石原孝二は、経験の仕方の差異を意識しながら経験を相互に交換し、共通の世界を作り上げていく行為主体の共同体を「現象学的共同体」と呼ぶ⁶。ここに含まれるさまざまな立場の“当事者”は、ある事象をめぐる、それぞれの体験を持ち／あるいは持たずに、それぞれの現実を生きている。

本研究が目指す“当事者性”とは、生きることに関する問いをめぐる多様な現実を生きる人々が関わり合うことにより立ち上げられる、“新たな当事者性”である。社会に生きる「私たち」とは、そのような当事者性の呼称でもある。

“研究”の意味するもの

本プロジェクトにおける“研究”とは、ある特定の専門分野に新たな知見をもたらそうとする、いわゆる学術研究とは異なる。私たちが問いかけたいと願うのは、私たちが生きる社会そのものである。だが、何か特定の社会問題について研究し、特定の立場に置かれた人々の権利擁護や社会構造の変革を目指すわけではない。本プロジェクトが目指すのは、“研究”という営みを通して、境界線によって隔てられている何かと何かのあいだの関係の変容を促し、社会にありうる別の姿——すなわち、「迂回路」——を見出そうとすることである。ここでいう“研究”とは、多様性と境界

のはざまに生きる人々と対話するための、装置のようなものと言えるかもしれない。

強いられた言葉とは別の言葉で語り、表現すること。そして、そのような場をひらくこと。私たちは、この“研究”という営み全体が、既存の価値観を揺さぶり、新たな関係性や価値を創造する表現行為だと考えている。それは、既存の「アート」そのものの境界にせまることにもつながるだろう。

3 「対話」の射程

概要では、企画段階で、それぞれのプログラムにおいて対話をどのように意識したかを述べた。では、本プロジェクトにおける「対話」は、実際には、どのようなところに見出されたのだろうか。

もやもやフィールドワークでは、当初、調査の一環としてインタビューの時間を長く設けることで、対話を試みようとした。しかし、調査をするなかで、実際に足を運ぶより前にすでに対話が始まっていることを実感する、印象的な出来事がいくつかあった。なかでも触れておきたいのは、ある調査先に調査を許諾いただけなかったときのことだ。

その返答から、「迂回路」という言葉に違和感を抱いていることが次第に明らかになった。「迂回」とは、辞書においては「本来の道を行かず、遠回りすること」と定義される。

それゆえに、障害のある人の歩む道が「迂回路」と関連して語られることを懸念し、難色を示されたのだった。私たちは、「迂回路」という言葉を用いるに至った経緯を、丁寧にお伝えした。障害のある人の歩む道が「遠回り」の道と考えているのでは、決してないこと。しかし、既存の道に何らかの障害や障壁、困難を感じた人が、それでも歩こうとするなかでつくった／みつけた道があるのではないかと考えること。そして、それをつぶさに見ることで、創造性を見出し、人が生きていく上でのヒントとして提示できるのではないかと考え、「迂回路」を探求していること。このようなやりとりをするなかで、最終的には調査にご快諾いただき、実現に至った。それは、互いに何を問題とし、どう感じ、どう考えているのか、その相違を少しずつ明らかにしていく作業であったと思われる。このことは、研究員が、単に調査のみならず、折衝からアーカイブまでを一連の対話の過程と捉える契機となる出来事であった。

哲学者の鷲田清一は、東日本大震災を経て「語ること」の意味を真摯に説いた著書⁷のなかで、「対話は『共有できるもの』を見つけるためのコミュニケーションではなく、むしろその反対」⁸だと述べる。「同じ考えや同じ気持ちになることではなく、たがいの差異をより深く、より細やかに感じていくことが対話というコミュニケーションの本質」であると。したがって、対話は「同じものを見ていても、

反応の仕方がこの人とじぶんとではこんなにも違うということ、あるいは、異質なものを受け入れる許容量が彼とわたしではここまで違うということ」を思い知らす。しかし、そういう対話の場面では、「何かがふと腑に落ちる」ということがある。つまり「自分自身の考え方、感じ方が変えられていくという体験」が起こり得るのだ。

「もやもやフィールドワーク 報告と対話編」においても、そういった場面が何度となく見られた。報告を受けて語られる感想のひとつひとつは、一見ばらばらで、何のつながりもないように思える。しかし、時間が過ぎるにつれ、それらは少しずつ重なっていく。それは、他者の考えを知り、自分の考えとの違いに気づくということを繰り返すうち、その違いに、関心が向くようになるからではないだろうか。「みなさんの意見を聴いているうちに、最初は〇〇とってたんだけど、だんだん変わってきました」という言葉が、ぼろっと参加者からもれる。少しの変化が、そこに生まれている。

あるいは、こんなこともあった。ある調査先でのインタビューの折、インタビュアーの女性が次のように話し始めた。「依頼をいただいて以来、ずっと考えてたんですけど、ここに書いてある『多様性』と『境界』って、うちにとっても重要なことだと思って……」。調査依頼がすでに問いかけとして受け止められていることを知った。それぞれの置かれて

いる立場や状況に即して、考え、答えてくれたのだ。

問いかけ合い応え合うこと。わからなさを思い知り、受け止めること。互いの差異、隔たりをきちんと見据えること。その差異、隔たりに、想像力を働かせること。それらがすべて「対話」である、と言えるのではないだろうか。本事業では、この一年間、一連の取り組みを通して、そういった対話の場をひらき、行ってきたと考えている。

4 「迂回路」をさぐる旅へ

ここまで、「対話型実践研究」としての本プロジェクトの概要、目指す方向性や姿勢、実際に研究を進める過程でどのように「対話」を行ってきたのかについて述べた。

次章からは、研究員による調査をもとにした論考、調査先の方によるコラム、トーク参加者による対話をもとにしたエッセイなどの様々な記述により、人々の暮らしや営みのなかに埋め込まれた、多様な「迂回路」の様相を描き出す。

私たちが一年間かけてさぐってきた「迂回路」とは、一体どのようなものだったのだろうか。本書に登場するさまざまな人や場、そこで生きられている生との「対話」を通じて、私たちと共に、あなた自身の「迂回路」をたどっていただければ、幸いである。

1	小田博志(2010)、『エスノグラフィー入門：〈現場〉を質的研究する』、春秋社
2	同書、22-23頁
3	同書、358頁
4	同書、20頁
5	石原孝二編(2013a)、『当事者研究の研究』、医学書院、12頁
6	石原孝二(2013b)、「精神病理学から当事者研究へー現象学的実践としての当事者研究と〈現象学的共同体〉ー」、UTCP Uehiro Booklet, No. 2, 『共生のための障害の哲学：身体・語り・共同性をめぐって』(石原孝二・稲原美苗編)、115-137頁
7	鷲田清一(2012)、『語りきれないこと 危機と傷みの哲学』、角川学芸出版
8	同書、127頁

「境界」とそこにある表現

——精神障害と表現をめぐるふたつの実践から

長津結一郎

はじめに

精神障害のある人をめぐる社会環境は、少しずつ変貌している。近年日本でも、退院促進を支援するとともに、精神障害のある人の地域生活を支え、定着に向けた制度が設計され運用されている。また就労という観点からも、2005年の障害者自立支援法¹の制定以後、障害のある人がどのように「自立生活」を送り、「はたらく」ことができるのか、現場では逡巡とともに日々が過ごされている。

過去を振り返ると、日本で精神科病院に入院している人は、根強い差別・偏見のもと、地域社会に復帰し生活を送ることが困難であると言われてきた。その結果、病院を退院しても行き場がないため病院に入院し続けざるを得ず、10年以上の長期入院＝「社会的入院」を余儀なくされている人々が多数存在している。この状況は日本特有の現象であり、ヨーロッパ諸国では精神障害のある人を病院ではなく地域で生活できるようにする取り組みは広がっている²。

現在は日本国内でもさまざまな形で、精神障害の持つイメージを脱却し、本来の当事者たちのありように注視し、ときにユーモラスに訴えかけるような取り組みが広がっている。北海道浦河町に拠点を持つ「べてるの家」は、患者自らが自分の症状に名付けを行うことから始まる「当事者研究」の手法で名を馳せており、新しい地域精神福祉のモデルとして全国に広がっている³。また東京都世田谷区にある精神障害者福祉施設「ハーモニー」は、統合失調症患者の代表的な症状である幻聴・妄想に着目して、「のう（脳）のなかに機械がうめこまれ、しっちゃかめっちゃかだ」「弟を犬にしてしまった」などといった文言を並べた「幻聴妄想かるた」をつくり上げ、静かなブームとなっている⁴。

こうした取り組みが広がる一方、現在でも、多くの精神科病院のなかでは、自傷・他害に及んでしまう入院患者に対して隔離・拘束を行い、劣悪な生活環境に留め置いている。この状況を少しずつ改善するような先進的な取

り組みも数多く見受けられるが、急性期を過ぎた患者を引き続き病院に入院させ続けなければならない状況はなおも続いており、その原因は複層的であると言えるだろう。

さてこうした状況のなか、「表現」はどのような役割を持つのだろうか。音楽や美術、演劇、ダンスなどの表現のみならず、人と人のあいだのコミュニケーションや、既存の価値観を捉え直すようなクリエイティビティは、この状況にどのように対峙することができるのだろうか。ここでは、「もやもやフィールドワーク 調査編」を通じて訪れた2つの取り組みを事例に取りながら、精神障害のある人と表現を取り巻く環境について、また表現を通じて現状をどのように変え、「迂回路」をどのように創り出してゆくことが可能なのか、という点について考えてみたい。

なかでも、ここでは「境界」ということに着目してゆく。精神科病院と外の世界のあいだには、いくつものカギが掛けられているという物理的な状況が象徴しているように、大きな隔たりがある。その結果、病状が回復してもなお、自らを受け入れてくれる他者の不在への不安感から、地域移行にためらいを持ってしまう。このような「自／他」を隔てる「境界」に表現はどのようにアプローチできるのか。さらには、就労や地域移行支援などの制度的枠組みを導入することで、制度の「内／外」をめぐる「境界」はどのような機能を持ち、それに人々はどのように向き合っているのだろ

うか。

1 表現によって動かされる「境界」 ——安彦講平による造形教室の実践から

〈造形教室〉という実践

JR高尾駅で、専用のバスを待つ。そこから揺られてほしい15分で、平川病院に到着した。随分と山の奥に来たなあ、という印象を持つ。社会から、世間から離れた場所に精神科病院は置かれていたのだなという歴史を思い起こす。大きな、いくつもの病棟に囲まれた駐車場に下ろされる。

その精神科病院の作業療法の一環として行われているのが、〈造形教室〉である。部屋の扉を開けると、病院としての風景が一変するような感覚におそわれる。イーゼルの上に置かれた大きなキャンバスがいくつも所狭しと並び、テーブルには画材が並べられている。ある机の上にはつくりかけと思われる作品が置きっぱなしになっている。棚を見やるとさまざまな美術に関する雑誌などが置いてある。まるで、どこかの美術大学のアトリエのようであり、病院内の施設というイメージとはかけ離れた場である。三々五々、人が集まってくる。施設の利用という名目から、病院が用意している紙に慣れた様子で記入し、それぞれの決まった席に向かう。この場を主宰する、^{あびこうへい}白く長い髪が印象的な安彦講平氏が、見学者

である私たちのうちの一人を呼び、部屋の真ん中に座らせる。いつものように、という雰囲気、集まった人々は、見学者をモデルにして、絵を描き始めてしまった！ その一方で、その輪には加わずに自分の作品を作り続ける人々もいる。私たちはその様子をじっと見つめていた。

2時間ほどすると「合評会」がはじまった。全員が今日つくったものや描いたものについてみんなの前で発表して、感想を語り合う。私たちも輪のなかに入れてもらう。モデルになった見学者はそれぞれの絵に感想を述べるように促され、必死に言葉を紡ぎ出していた。発表した人のなかには絵だけでなく、造形について紹介する人や、詩を朗読する人もいた。「ここをこのように描け」「この色は違う」などといった「指導」というようなことは一切ない、ゆるやかな時間が流れていた。

安彦氏による〈造形教室〉はこのように、参加する人々がそれぞれのペースで関わり、自らと向き合いながら作品をつくる場を保証しているようだ。安彦氏は早稲田大学文学部で芸術学を学んだあと、精神科病院の患者の声を聞こうと、看護助手として東京足立病院に関わるようになる（その関わりは現在に至るまで続いている）。その後、院内に〈造形教室〉を開き、実践を重ねてきた。また、1969年に創設された鍵も格子もない精神科病院「丘の上病院」でも〈造形教室〉をはじめが、病院の閉院に伴い閉鎖。しかし、利用者から熱烈

な声があがり、多くの患者が移管していった平川病院で再び〈造形教室〉をはじめて、現在に至っている。

個々の存在と、そこにある「境界」

そんな安彦氏の50年近くにもなる実践については、これまでさまざまな分野で注目され言及されてきた。平川病院の〈造形教室〉を撮ったドキュメンタリー映画『破片のきらめき：心の杖として鏡として』（高橋慎二監督）は海外の映画祭で観客賞を受賞している。また研究分野でも、たびたびフィールドワークの対象になり、その成果はさまざまな形で発表されている。こうした視点はおもに、自らの生きづらさを作品に投影した自己表現として、社会のなかで生きる意欲を取り戻すプロセスを生み出すことへの着目である。また、具体的な表現の一つひとつについて、その人生や病気などの背景を交えながら分析していくような視点も多い。そのような蓄積に対して私たちが、1日の見学のみで積み重ねられるものは非常に小さい。

ただ、私たちがこの現場に赴いて感じたのは、幾層もの「境界」とそれを突き動かし、ずらしてゆくダイナミズムである。それは、「もやもやフィールドワーク 調査編」第1回の調査としてある種の基軸となっていくような視点でもあったように思われる。

ひとつは、「私」と「病」のあいだにある境界である。自らの病について深く向き合うな

かで表現を生み出すというプロセスはこれまでの諸研究が示してきたことでもあるが、そのプロセスを通じて、「内にある暗部を晒すことにより、逆に解放されていく様な気がした」というある作者のコメントにもあるように、病それ自体を表現を通じて別の形に昇華させるような機能が、この〈造形教室〉の取り組みには内在している。またそのような、一人ひとりが自分に向き合うような環境や関係性が、安彦氏らスタッフの寄り添い方により担保されているようであった。

また、〈造形教室〉に居合わせる人々と「私」との関係性も興味深い。合評会では、自らと向き合った結果として生まれた作品を、その場に居合わせる人々に共有していく。そのことで、より深く「個」と「個」の存在について伝え合う関係が生まれていく。こういった場を何度もひらくことで、その人の異なる側面を浮き彫りにし、人々の関係のあいだにある境界を少しずつ変容させていく。また、見学者が突然モデルになることを薦められたように、見学者もただの「見学者」ではなく、その場・その時間を共有しているという意味ではメンバーと同じであり、ともに境界を侵犯し合う存在である、という意識を伝えていたのではないと思う。

最後に触れておきたいのは、「病院」と、〈造形教室〉とのあいだにある境界である。今でこそ定着している〈造形教室〉の取り組みであるが、安彦氏が東京足立病院ではじめた際

には、安彦氏が個人的にやっていることであり、ときに治療の妨げであると考えるような病院側の姿勢も見受けられたという。安彦氏の活動は患者の大きな支持を集めて現在ではそのような断絶はなく、〈造形教室〉をどのように病院のなかに位置づけられるだろうか、というような視点で病院側も捉えているように感じた。病棟内をめぐる〈造形教室〉でつくられたいくつもの作品が飾られ、日々の生活に彩りを添えている。それは作者にとっても自己肯定感を生み出すものであるかもしれない。

このように、〈造形教室〉という場をひらくことで、幾層もの境界を、ずらし、つなぎ変えている。ここで立ち止まりたいのは、表現という行為それ自体にそのような価値観の転換を促すきっかけが内在化していることのみならず、それを支える人々のふるまいや制度のありようによって境界が揺れ動くということが起こっている点である。次節ではそのような視点から「境界」と、そこから考える「迂回路」のありようについて述べてゆく。

2 「個」としての「社会参加」 ——Crazy Catsの実践から

さて、ここで視点を病院から地域に移していこう。ここから紹介するのは、地域で運営されている通所の福祉施設の活動である。な

かでもこの施設に私たちが着眼した大きな理由は、「福祉施設の就労支援事業の一環としてライブハウスを運営している」という点であった。その希有な活動内容に目を引かれお話を伺うと、実はその奥に、精神障害をめぐるさまざまな限界と、「迂回路」のつくり方が見えてくる。

Crazy Catsが生まれた背景

Crazy Catsは、東京・世田谷区の梅ヶ丘という地域に位置している。梅ヶ丘は、障害者支援についてのモデル地区ともなっており、地域のなかで障害のある人がいることが周知されている雰囲気を持っている場所である、と、現在Crazy Catsで施設長を務める戸島大樹氏は教えてくれた。

話は、Crazy Catsができる前、前身となる福祉施設「にゃんこの館」で戸島氏が8年ほど勤務していた頃に遡る。施設の近所のラーメン屋で昼食を取っていた戸島氏は、ラーメン店の店員に「あそこの施設の方？ いつも公園清掃してくれていてありがとう、ごくろうさま」と言われたという。地域移行が課題となっているなか、地域の人たちに受け入れられていることを知り嬉しくなった戸島氏は、施設に戻ったあと、利用者さんたちにこのエピソードを話した。すると、思いも寄らない反応が返ってきたという。「自分たちの存在がバレーしているのか！」と。

インタビューで戸島氏はこのことについ

て、「とにかくびっくりした」と話す。「結局、彼らにとっては、商店街にありながらも、自分たちのその〈にゃんこの館〉という場所が、閉じられた、保護された、コロニーのように」思われていたことに衝撃を受けたのである。いくら病院から退院して地域で生活を営んでいるとしても、自宅と施設の往復で、「まるでペールを張ったみたい」に」その他に地域で生活しているはずの時間はなかったことにしまい、支援者とだけ関係を作って生活をしているのは、入院生活と何ら変わらないのではないかと考えたのである。

そこで戸島氏はこの現状を打開するために、「脱施設化」をめざし、施設利用者もそうでない人も交流できるような新しい施設を立ち上げよう、と一念発起したのだ。その結果1996年につくられたのが「Crazy Cats」であった。「にゃんこの館」の利用者を移管する形で施設利用者を増やし、梅ヶ丘を拠点として活動をはじめた。

戸島氏自身はこの立ち上げに際して、音楽を活用しようということは当初から狙っていた。その考え方には、戸島氏自身が以前関わったバンドが大きな影響を与えていた。精神障害者共同作業所の利用者とスタッフによるそのバンドは、即興演奏を主軸として、「誰が障害者かわからない」ような演奏で、かつ、支援者／利用者という関係性ではない「支え合い」が起こっている場であったという。「専門性を持たずとも、また安易に「友人」という

ことでもなく、適当（絶妙？）な距離感を持った「隣人」として当事者と共に在り続ける」可能性を見たという戸島氏は、その状況を自らの施設で作ろうと試みたのである。場所を借り防音対策をし、音響機材をそろえ、口コミで場所に興味をもった人々も立ち寄れるよう施設の開所時間を昼から夜までにして、多様なプログラムを実施していった。

そのなかで生まれたイベントが、「こんとん」である。これは1997年頃、利用者と「ビジター」と呼ばれる地域の住民によって自主的に立ち上げられた、朗読と即興セッションによるイベントである。楽器ができるかどうかは関係なく、また日タルーティンワークとして行われている支援とは一線を画した月に1度のイベントということで、参加する人々のモチベーションも非常に高く実施できたという。このことをうけて、自主企画ではなく、施設の公式イベントとして継続していこう、という機運が高まり、現在に至るまで継続している。

この頃「こんとん」を訪れていたのは、施設利用者のほかに、他の施設の支援者、ミュージシャン、将来を模索している学生などがいたという。また、精神科病院に通院しているが福祉制度にはつながっていない人々というのも多数関わっていたという。仕事をしているが続けられず、適応できない、などといった、制度のはざまにいる人々が、「こんとん」をひとつの「居場所」として活動するように

なったのだという。

ただ、この環境というのも長くは続かない。多様な背景を持つ人々がそれぞれの関わり、それぞれの居場所を求めてやってきた「こんとん」という場は、さまざまなエネルギーを内包し、ゆえにトラブルも多く、衝突も堪えなかったという。しだいに、「ビジター」として来ていた学生が就職してしまったり、社会人が足を運ばなくなったり、新しい人が入ってこなくなったり、と、継続に伴うマンネリ化も相まって、活動が停滞してしまう。施設を続けていくためには、Crazy Catsを「居場所」とする人たちだけではなく、もっとさまざまな人々との関わりを作っていかなければならない、と戸島氏はこの頃考えていたという。

そこにやってきたのが、「障害者自立支援法」の波である。障害者支援に関わる施設が「自立支援」ということで「就労」を目指さなければならない状況のなか、Crazy Catsは岐路に立たされる。従来のやり方ではなく、「就労」としての「作業」を組み込まなければならないためだ。一般的な福祉施設ではパン作りなどの軽作業がここで選ばれる傾向があるが、戸島氏は「(防音設備・音響設備を整えた)この場を活かすことしか考えられなかった」という。そうして考えついた策が、「ライブハウスを運営する」ということだったのである。

といっても、障害のある人がステージに登るというわけではない。これまで「こんとん」を通じて出会ってきた人々から出演者を探し

た。利用者のほうは、厨房やカウンター、フロア、PA(音響操作)などといった「裏方」の役回りを担当する。そしてそれぞれのスキルアップに役立つような講座をプログラムとして開設し(ギター・コーラス・テルミン・バンド・作編曲・PAなど)、個々に「個別支援計画」を策定し、就労継続支援B型⁵の施設として走りはじめたのだ。

制度のはざまに

このように、ライブハウスの運営に踏み切ったのは、障害者自立支援法に伴った経営判断であったと同時に、「脱施設化」の行く先に見えたある種の限界への打開策として提示されてきたものだったのである。

ただし、その「脱施設化」を目指すうえでの象徴的な場となった「こんとん」については、必ずしもネガティブな印象で語られているわけではない。「こんとん」の場は、「脱施設化」をスローガンに掲げた戸島氏の方針に叶った、当事者／非当事者が混じり合っていた場であったようだ。それゆえ、「あの頃は楽しかったね」というような憧憬感を抱く、ということも、ないわけではない。ただしここで注目したいのは、一緒にインタビューに臨んでいただいたスタッフの垣内氏の次の発言である。「おそらく人間関係として一番育ってた時代はどこかって言ったら、最初の、ほったらかされていた時代なんですよ。ここは一番育っていますよね。だからその頃本当にある程度やれ

るようになって、仕事できるなって思っ出て行った人たちは結構、社会に順応できているんです」。

「こんとん」がはじめた頃は、事業所のあり方として、「個別支援」も、利用者を「管理」することもしないことをモットーとしていたという。なぜならそれは、利用者と支援者だけではない、多様な人々が関わっている現場であったからだと言える。「人間関係のるつぽで生き残れば、外に出ても大丈夫、という考え方」を持っていたのである。戸島氏が述べていた「隣人」というような関係性を育むことができれば、実際の社会においても人間関係を構築できるのではないかという考え方に基づいていたのである。そのため「ほったらかされていた時代」と称するように、一般に想像されるような支援やケアを行わないという選択をしていたのだ。

ただしそのことはかなりリスクな選択でもあり、実際に人間関係や経営上のトラブルも多かったという。事業所を外に開き、「こんとん」などを通じて施設のなかにひとつの社会の縮図を形づくことで「脱施設化」を目指した先にあったのは、豊潤な人間関係の隆盛の一方で、衝突と反発、さらには脱落であった。

一般に、こうした破天荒な取り組みは、制度にはめ込まれてしまうことで活動が丸くなってしまふことが多く、Crazy Catsの活動も一見そのように思われる。しかし、障害者

自立支援法の制定を通じたライブハウス事業への転換は、「脱施設化」を目指し、「こんとん」とした場を経由した新しい福祉施設のあり方を提示している。制度が、新しい展開を後押ししているとも考えられるかもしれない。制度から自由になることで生まれる不自由さがあり、またその逆に、多様なあり方を担保するために制度をうまく利用するというしたたかさが、施設運営に際して希求されたのがCrazy Catsの実践ではないだろうか。

「個」としての「社会参加」

インタビューで「穴だらけの大風呂敷をつくったからこそ、今があるんだろうなと思います」と戸島氏は述べた。まさに大きな夢を広げることで得た知見なくしてはなし得ない「今」の様相を最後に捉えてみたい。垣内氏は次のように発言した。

「僕は健全なものを目指しているというつもりすらないですね。いかに社会に参加してもらえるかっていうところなので、例えばその人が、不健全な形で社会に参加しようが、それはそれでありだと思っています。社会にいかに参加できるかっていう基準でしか考えていないので」。

「社会参加」という言葉からは一般には、常勤の職に就いたり、固定的な収入を得たりして、税金を納め、自立した生活を営むことを想起させる。しかし戸島氏のこの発言はそのこととは一線を画している。その背景にある

考え方は、やはり「こんとん」を通じて育まれたものである。「一緒に不健康になるプレイはもういっぱい見てきたから、できるだけ一緒に健康になっていっていただきたい。でもその健康っていうのは何かって言ったら、またそこはね、簡単なことではなくて、数値化されるような、何か、それは本来幻想に近いようなもので。やっぱり、誰でも人間不健康な部分を持ちつつ生きているみたいところで、共感とかが、一定程度あるようななかで、うちに通っているような人たちも、そこに乗っかって行けたらなという風には思っていますね」。

このような、施設の中と外の人が混じり合い、ときに衝突し合いながらともに「場」を構成していたプロセスのなかで、「誰でも不健康な部分を持ちつつ生きている」という境地にたどり着いたうえで、Crazy Catsは一般的な「社会参加」のありようを求めないという考え方に至ったのである。どんな仕事でもどんな生き方でも「社会参加」である、とする「個」としての選択の幅は、「こんとん」で出会ってきたさまざまな人々の幅でもあるのだ。

3 「境界」とそこにある表現

ここで最初に掲げた問いについていま一度振り返ってみたい。表現は、「自／他」を隔てる「境界」にどのようにアプローチできる

のか。さらには、就労や地域移行支援などの制度的枠組みを導入することで、制度の「内／外」をめぐる「境界」はどのような機能を持ち、それに人々はどのように向き合っているのだろうか。

平川病院の〈造形教室〉の事例は、さまざまな「境界」に対して、表現という行為それ自体に、境界を突き動かすような価値観の転換を促すきっかけが内在化しているという象徴的な事例であった。「私」と「病」のあいだ、〈造形教室〉に居合わせる人々と「私」というあいだ、「病院」と、〈造形教室〉とのあいだなどの領域を、じわじわと浸食しながらずらしていく視点が見出された。またそれだけではなく、〈造形教室〉を支える人々のふるまいや制度のありようによって揺れ動く境界もあることを明らかにした。

一方、Crazy Catsの取り組みは、この問題について大きく2つのことを示唆しているように思われる。ひとつは、コミュニティの「内側／外側」という境界線をはずすことで巻き起こる出来事についてである。施設と自宅の往復ではなく、地域に暮らすさまざまな人々と混じり合いながら「社会参加」への道筋を確保してほしい、という願いから生まれたCrazy Catsは、音楽を媒体にしてさまざまな人々を施設のなかに取り込み、「福祉施設」という価値観を大きく逸脱するような活動を「こんとん」を通じて繰り広げてきたと言える。

そのことは、当初想定していたような「脱施設化」というスローガンを大きく超え、だれが利用者かわからないような渾然一体となった場を創り出した。だがその一方で、さまざまな人が関わり合うことで生まれるトラブルも多かった。特に精神科病院に通院しているが福祉制度にはつながっていない、制度のはざまにいる人々の「居場所」として機能していたため、それぞれの立場や領域を侵犯する行為があった際に軋轢が生まれるのは想像に難くない。施設の枠組みを解体し、開かれたコミュニティを形成する一方で、絶えない衝突とともにその限界、すなわち「絶対的な歓待」があり得るものではないということを示している。

もうひとつは、制度的枠組みを逸脱することと、制度的枠組みに順応することの「あいだ」にあるふるまいについてである。障害者自立支援法にとどまる話ではないが、制度というものは概して、運用していくなかで柔軟な対応が希求される現場でも、ときに制度がその足かせになることもある。Crazy Catsの活動のなかでは、利用者一人ひとりに対して立案しなければならない「個別支援計画」についても、「全部が全部言葉にできるわけではない。奥底でどう感じているかはわからない」「一人の場合でOKでも、ほかの人に適用できるわけではない」という価値観を持っており、個別支援計画を立てることありきで活動していないように見受けられた。むしろ、利用者

個々人にとって、すでに生のありようがそれぞれ異なっているため、制度的な条件として仮に支援計画を立てたとしても、その枠組みからにじみ出たり、はみ出してくるような個々人のありようというものも見据えた活動を行っているように思われる。制度を活用することで個々人との関わりが薄れてしまう、ということに陥らないために、制度がない場で個々人に関わる視点と、制度がある場で個々人に関わる視点を組み合わせながら現場を成立させているのがCrazy Catsの実践であると言えるだろう。

そしてこの3つの視点のすべてに、表現を通じた営みが圧倒的に影響を与えている。非言語的なコミュニケーションのツールとしてももちろんだが、多様な人々が多様なままで過ごすということを形に表す方法として表現が機能しているとすれば、その機能は単に一人ひとりのなかだけに帰するものではない。自分と他者のあいだにある境界線をときには守り、ときには崩し、さらには他者からの視点でみずからを捉えようとする動きに対して順応したり抵抗したりする、そのすべてのふるまいの根源にあり、揺るぎない「私」の姿を形作ろうとするのが、「境界」という視点から見い出される表現の姿なのではないだろうか。

- 2006年に施行された、障害者の地域生活と就労を進め、自立を支援する観点から、福祉サービスや公費負担医療等について共通の制度のもとで提供することとした法律。給付の対象者等や地域生活支援事業などを定めるとともに、利用者も利用したサービスや所得に応じて原則1割の費用を負担することなどが定められた(厚生労働省「法律の概要」参照)。現在は制度が発展して障害者総合支援法となっている。
- おもにイタリアの精神障害については下記の文献や映画に詳しい。大熊一夫(2009)、『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』、岩波書店。ジュリオ・マンフレドニア監督、『人生、ここにあり!』(DVD)
- べてるの家については、浦河べてるの家(2005)、『べてるの家の「当事者研究」』、医学書院などを参照。
- ハーモニー(2011)、『幻聴妄想かるた 解説冊子+CD「市原悦子の読み札音声」+DVD「幻聴妄想かるたが生まれた場所」』、医学書院
- 通常の事業所に雇用されることが困難な障害者に対して、就労の機会を提供する「就労継続支援事業」には、雇用契約を結び利用する「A型」と、雇用契約に基づく就労も困難な人々を対象とした「B型」の2種類がある。

平川病院〈造形教室〉 東京都八王子市にある、平川病院(精神科病院)内の〈造形教室〉。1995年より安彦謙平氏により主宰されている。「自己表現を通じて自らを“癒し”、支えていく営み」としての創作活動が大切にされている。毎年、メンバーが自主的に準備や展示、運営を行い“癒し”としての自己表現展」を開催。各方面に大きな影響を与えている。
Crazy Cats 東京都世田谷区梅丘にある、障害者総合支援法の障害福祉サービス事業の一つ、就労継続支援B型事業所。1996年、東京都の補助金事業である「精神障害者共同作業所」として開設され、2013年度より現在の事業形態に移行。当初は「就労以外の社会参加を模索」が表のテーマで活動。裏テーマは脱施設化。

精神障害者を巡る個—集団—社会関係のほんのさわり

戸島大樹

まず、長津氏の「境界とそこにある表現」を読ませていただいて、正直面映い気分が先に立っている。書いていただいたような大したものではなく、なかなか考えたようにはいかないことばかりだが、今回のフィールドワークの対象として選ばれたことを、自分の実践を振り返るいい機会とさせてもらっている。

それでは、長津氏のテキストから感じたことを書かせていただく。まともではなく、テキストからも離れるかもしれないがご容赦願いたい。

精神保健福祉の問題について、長津氏のテキストの前段にも述べられているが、社会問題として捉えるならば、べてるの家のような共同体単位での〈社会参加〉は、日本でのモデルケースの一つとして大変重要だと思う。筆者も一度、べてるの年次総会にお邪魔させていただいたことがあるが、同時に幻覚妄想大会を見ることができた。ご存知だとは思いますが、〈症状〉をおかしいもの＝可笑しい（しかしその世界を生きる者にとっては同時に切実）ものとして捉え直すことで、それを持つ者の生き延びる途を拓こうとする試みだと思う。ただ、これはべてるにしろハーモニーにしろ、共同体のなかでそのような価値観や思想、それらを下地にした表現が育まれ、共同体の外に文化として伝わっている。言ってみれば、共同体丸ごとの社会参加であり、障害者個人が一人で社会に肯定的に受け入れられるのとは違うと思う。

本来であれば、発症したあと、精神病院に入院して、それまでの人間関係が断ち切れてしまわないように、入院をできるだけ短期にし、元の地域社会に戻せるなら、それがベストではなかろうか。それは入院に限らず、中間施設（この「中間施設」というものも複雑な問題を抱えているので、ぜひ1960年代の中間施設論争から現在の病棟転換型居住系施設問

題まで参考にされたい）が殆ど終末施設のように変貌してしまうところでも、課題となっている。地域社会に戻せないから、同じ問題を抱える病者同士の新たな共同体を作り、そこから社会全体に発信するという形にならざるを得ないのか、どうか。この方法で市民権を得るほどの影響力を持つことができれば、これも一つの突破口であろう。

しかし、この共同体のなかでの〈症状〉を異化する文化の熟成は、外側への志向性をしっかりととたないと、下手をすると内側への求心力ばかり強くなりかねない。所謂、内輪受けであり、「判る人しか判らない」かえって閉鎖的な空間を作ってしまう。

また前述したように、個々としての社会参加促進は、その障害者当人を一旦は（一時的にでも）排除／疎外した集団に戻そうとすることが支援者の第一義だと考えているが、それは現在のところ、本人側に相当な変化／努力を強いる関係であろう。なかなか、その集団自体を当人を受容するように変化させることは難しく、相応の人的資源やエネルギーを要することである。しかし、これが上手くいったときこそ、かなり本来の意味での「普通に街で暮らす」ということができるのだと思う。無論、前述の共同体単位での社会的認知が進むことは、後述の個々の本来居た社会集団への復帰に向けて、元居た集団と新たな帰属との相補的相乗的な関係が成立することもあるし、そうなることを望んでいる。結局は、（少なくとも業務として臨んでいる者にとっては）凡庸なことにたどり着くが、「精神障害者文化」とも呼べるものを受け止めた支援者は、この集団の辺境に位置しながら、「こんとん」や「幻聴妄想かるた」や「当事者研究」のような何らかの表現装置を以て、異文化コミュニケーションの成立を試みていると言ってもいいだろう。

話がやや観念的になったが、ここで漠然とした〈地域〉という言葉でなく、誰にもあるリアルな生活場面で、精神障害のある人を文字通りの「隣人」として迎えることを少し考えてみる。筆者の住む都市部での「隣人」は、よく言えば、生活する場所にある否応なしの共同体への同化を迫られない。実空間としての生活圏ではなく、共通項を持った人同士が発達した交通手段を持って離合する複数の集団によって成り立っている。そういう意味では、多様性を受け入れる下地が少しはある。都市の生活圏はそういう性質のものだと言える。一方で、それらの集団から離れたところで、例えばマンションの隣同士のような剥き出しの個と個の、共通基盤が極めて薄い関係において、それが悪化した場合の問題解決は、そこでまた新たな共同体でも作れない限り、個々を包摂する社会集団の規範に依らざるを得なくなる。支援者は対峙する文化を相対的に評価するような第三者的立場では居られない。このとき精神障害者のようなマイノリティは、同調圧力に晒される。個人一人では集団文化は作り得ず、芸術家のような強烈な自我で同調者を生むようなことがない限り、対抗し得ない。その為、それに対峙しようとする〈症状〉という表現は逸脱し誇大になるのかもしれない。

少し話が変わるが、ある医師は有床の病院から診療所を開業した時点で、それまで組織や体制に守られていたことを痛感したそうだ。患者の〈症状〉（それも一つの表現ではある）が悪化しても、保護室もあるような有床の病院で働いているのとは、緊張感が違ったという話だった。ましてや茫洋とした社会のなかで、病院や施設で出会っているのとは全く違う、医療や福祉の現場からも離れたところで出会うというのは、マジョリティにとってもその抛り所を少なからず揺さぶるものなのだろう。

ここまで、大変乱暴に個人—個人、個人—集団、集団間など精神障害を持つ人のいる関係に触れてきた。自分の力不足で正にほんのさわり程度しか書けないが、皆さんのフィールドワークの材料の一つになれば幸甚である。

さて、最後になったが触れておかなければならないことが一つあるので、それでこの駄文を締める。

それは、自我境界の脆弱性についてである。統合失調症などで見られるもので、〈精神障害者文化〉との異文化コミュニケーションを図ろうとするときに大変注意しなければいけないことだと実感している。精神障害者の日常は、最近ではようやくテレビでもNHKなどが取り上げている。今まで一般の人がこうした世界を知ることとはほぼなかったの、ともすると、活発な交流を無批判に肯定してしまいがちだが、彼らの自我に侵食しないよう気をつけなければいけない。また、同じ精神障害者同士の交流でも無制限に行なうと、場合によっては互いの侵食具合が複雑になり、例えばお互いを息苦しく（生き苦しく）する共依存などが起きてしまう。

これらのことも考察を重ねていくと、個々の生存スキルとしての表現の獲得に寄与するのではない。皆さんの研究が、困難を抱え社会で生きる術を探している人たちの助けになることを願いつつ、終わりとする。

とじま だいき

特定非営利活動法人響心会Crazy Cats施設長、精神保健福祉士。1962年生まれ。東京で生まれ育つ。地域精神保健福祉分野に従事。東京都が全国に先駆けて行なった精神科救急での非常勤事務当直の経験もある。1996年、Crazy Catsを開設。また、様々な形で自身も音楽活動が続けている。

「家族」の多様性と境界

——乳児院とLGBTの里親支援の現場から

三宅 博子

1 「家族」って何？

「家族」って何だろう？ 自分自身を振り返ってみると、私が「私」としてあるときには、すでに「家族」があり、気がつけば「私」が「家族」の一員であることを当たり前のようにして暮らしてきた。多くの人にとって「家族」とは、「生まれて最初に接した人間関係であり、あるときは自分を縛りもし、また安らぎの場にもなる。今ここで生活を共にしているか否かに関わらず、私に生涯ついてまわる関係」といったような、ぼんやりとしたイメージで捉えられているかもしれない。

本稿で取り上げる、家庭での養育を受けられない乳幼児を養育する麻布乳児院と、LGBT¹の里親支援活動を行うRFC（レインボーフォスターケア）の事例は、私たちにとって「家族」とは何かを改めて問い直させてくれる。辞書によると、家族とは「夫婦の配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集

団。社会構成の基本単位」²である。仮にこの定義にしたがえば、乳児院のこどもたちも、LGBTも、ある意味で「家族」であることから疎外されている存在である。しかし、もともと「家族」ではない人たちが、「家族」であろうとする取り組みに目を向けたとき、そこには「家族」にまつわる多様性と境界の問題が見えてくる。この、「家族」であろうと希求する営みのなかに、多様な人々が共に生きる技法としての「表現」のヒントがあるのではないか。これが、麻布乳児院とRFCを調査先として挙げた際に漠然と抱いた問いである。

乳児院や里親制度は、何らかの事情により家庭での養護が受けられないこどもを養護する「社会的養護」³を行う仕組みの一つである。平成26年3月版『社会的擁護の現状について』によれば、対象となる児童は4万6000人⁴。家庭的な養育環境を目指して、施設のケア単位の小規模化、里親やファミリーホームなどが推進されているものの、里親等の委託率は

14.8%にとどまり、依然として施設入所率が85%以上を占めている現状がある⁵。

しかし、実際の現場で行われていることは、単に“かわいそうなこどもに家庭的な養育を与える”といったことにとどまらない。麻布乳児院やRFCの活動からは、社会規範的な「家族」像に直面しつつも、血縁関係だけに囚われない多様な「家族」のあり方を志向し、支えようとする人々の姿がかいま見られた。と同時に、そこに引かれる境界線の鋭さも浮かび上がってきた。同じように「こどもの、そして家族の幸せ」を願うはずの人々が、理想の「家族」とは何かを巡って、境界線をあらわにする場面。それは、とりもなおさず、私たちの内側にある境界線があらわになる瞬間でもある。

本稿では、麻布乳児院とRFCについての「もやもやフィールドワーク 調査編」「報告と対話編」を通じて、それぞれの現場において「家族」がどのようなものとして立ち現れてくるのか、社会的規範としての「家族」像の問題、「家族である／になる」ことを巡る多様な関係のあり方と、その表現性について考えてみたい。

2 麻布乳児院

社会福祉法人慶福育児会麻布乳児院は、東京都港区にある入所定員80名の乳児院であ

る。乳児院とは、児童福祉法（昭和22年法律第164号）により定められた、何らかの事情により保護者の養育を受けられない乳幼児を、24時間養育する施設である。港区広尾にある麻布乳児院は、全国130か所⁶、東京都内に10か所⁷ある乳児院のなかでも、都会的な環境のなかにある施設だろう。入所児の内訳は、0～1歳未満の乳児と1～3歳未満の幼児が約半数ずつ⁸。在籍日数は、0～3か月未満の短期間から、年単位に渡る場合まであり、満3歳を迎えると児童養護施設等に措置変更される。入所理由は虐待によるものが多く、次いで母親の疾病、次子出産、母親の若年、未婚、離婚、就労、受刑等がある。

「家族」を模したケア

麻布乳児院の特徴は、「家族」を模した小集団単位で養育を行う「小規模ユニットケア」にある。平成3年の施設建て替えの際に、それまでの集団型養育からユニット型に変更され、当時の先駆的な取り組みとして話題になった。居室のあるフロアは、いくつもの部屋に区切られており、それぞれの部屋に小さなキッチンやトイレが設置されている。部屋の一つ一つを一軒の「家」とし、3～4人の乳幼児と1人の養育者（看護師・保育士）が朝から晩まで生活を共にする。また、1人のこどもに対して1人の養育者が担当となり、入所から退所まで一貫して受け持つことで、特定の大人との関係を育んでいく。このように、空間的

にも、人間関係的にも、「家庭」に近づけた環境での養育が行われている。

小規模ユニットケアによって、安定した環境のなかで特定の大人との関係を育むことの基盤には、「愛着形成」という考えがある。「愛着」とは、乳児と養育者が築く親密な相互関係のことを指す。乳児はアイコンタクト・泣き・微笑み・発声などによって他者との関わりを保ち、自らの生存を維持しようとする。養育者は、乳児の様子を読み取りながらそれに応えていく。この「自分が働きかけると、相手（養育者・環境）は応えてくれ、事態はよい方向に変化する」という信頼感や「自分は周囲に温かく受け入れられている」という安心感が基盤となり、乳幼児の自己感や心身の発達へとつながっていく。「愛着形成」は、麻布乳児院における日常の取り組みの主眼ということが出来るだろう。

「みんなで見ていく」という子育て

しかし、心理担当職員A氏へのインタビューからは、ここで目指されている養育が単に擬似的な「家族」環境での乳児と養育者の愛着形成にとどまらず、こどもが育つことを中心として様々な関係をつなぎ、支えていくことであることがわかってきた。

A氏が見ているのは、何よりもまず親子の関係である。「私たちは、いつもお母さんとの関係を見据えています。……施設って結局は分離して、お母さんとこどもも境界がで

きてしまっているのです。こどもと担当養育者との関係だけではやっぱり繋がっていかない」。施設に入ることが親子にとってある種の境界となるのと同時に、施設にこどもを預けている親を取り巻く境界もある。「お預けになられたお母さんって、友達に（こどもを）預けていることを言えなかったり、家族にも言えなかったりして、地域にしながら孤独感を持っていらしたりする」。乳児院の職員たちは、それぞれの親子が抱える事情に、ときには葛藤を感じつつも、「多様な子育て」のあり方に思いを馳せ、肯定しようとしている。

A氏によれば、ここで目指されているのは、親に代わって子育てするのではなく、一緒にこどもが育つことに向き合い、「みんなで見ていく」という姿勢である。「（乳児院にいるこどもに対して）施設に預けているかわいそうな子とかいろんな社会的イメージがあると思うんですけど、何年も働いてみて、……みんなで愛を持って、一人の子にこう……みんなでその子のことについて話し合う時間もあるし、いろんな面から見られたりいろんな顔が見られたりする。……決して愛されていないことはなくて、みんなで見ていくっていう子育てもあるのかなと思ったりします」。

「みんなで見ていく」子育てのまなざしは、親子―施設の関係にとどまらず、地域、社会へと拡がりは始めている。「やっぱり施設と社会のあいだにも境界がある。……地域の子育て機関と乳児院がつながるというのがな

かなか難しかったんですけど、ここ数年は、施設に入所中もそうですし、おうちに帰るっていうときには会議も頻繁に行われて、関係者がそろって、課題を明確にしたりして、地域につなげて、地域で子育て出来るようにお返しするという形で、施設と地域が少しずつつながってきたかなあとと思います」。

「表現」を支える環境づくりへ

私たち訪問者が、こどもたちのいる居室に足を踏み入れると、どの部屋のこどもたちも、一瞬戸惑ったような顔をして、異質な来訪者である私たちを見つめ、動かなくなった。次の瞬間、ある子は表情をゆがめて泣きだし、ある子は声をあげて養育者のもとへ駆け寄った。私たちのもとへ駆け寄って甘えてくるこどもは、一人もいなかった。心理士であるA氏によると、これこそが「愛着形成」がなされていることの表れだという。特定のひとのあいだに愛着関係があることは、そうでないひとのあいだに境界があるということでもある。この境界は、自分を守り、他者との関係を育むための境界なのだ。

一方、この境界が全く異なる表れ方をする場合にも出会った。乳児院の中庭に面した窓から、外で遊ぶこどもたちの姿が目に入った。何気なく会釈して通り過ぎた背後から、こどもたちが一斉にガラス越しに顔を押し付け、競いあうようにしてユーモラスな表情を見せたのだ。自己という境界を作りつつ、他者へ

と向かう「表現」。こどもたちの身振りは、日常生活における「表現」の一つのありようだと感じられた。

乳児院で目指されている「愛着形成」、「みんなで見えていく」子育て、そしてこどもたちの日常の「表現」を考え合わせてみると、ここで志向されているのは、こどもたちが自分を守り、他者と関わるための身振り＝「表現」を、親や支援者・地域・社会も含めたみんなで支えていくことではないかと思われる。それは、「表現」を支える環境をつくることも言い換えられるだろう。

3 RFC（レインボーフォスターケア）

RFCは、里親制度を含む社会的養護と、社会的養護に関心のあるLGBT当事者・支援者をつなぎ、LGBTがこどもの社会的養護に携わることを目的として、2013年に設立された団体である。現在、LGBTを里親として活用するための法律・制度の勉強会や政策提言、海外のLGBT里親についての情報提供、こどもとLGBTを取り巻く環境について幅広い視点から考える勉強会の開催等を主なミッションとして活動している。また、施設や里親家庭で暮らすLGBTのこどもの問題にも取り組んでいる。

代表の藤めぐみ氏によれば、団体設立のきっかけは、里親制度の勉強会にLGBT当事者が

出席したことである。設立当初、日本の社会的養育が施設入所に偏っている現状に対し、「LGBTを里親の候補として活用すれば里親登録者数や里親家庭が増えるのでは」という思いがあったという。だが活動を進めていくにつれて、単に里親家庭の不足を補うためにLGBTを活用するというよりも、「里親を希望する者が里親になれる制度を用意することで、こどもたちが安全に、安心して暮らせる家庭を増やす」ことに主眼が移っていったという。すなわち、LGBTを含めて「なりたい人が里親になれる」制度の整備である。その過程で直面したのは、LGBTが社会のなかで「家族」として生活することからさまざまな形で疎外されている現実だった。

LGBTが「家族」になることの困難さ

藤氏によれば、LGBTのカップルが「家族」として子育てをするのには、大まかに次のような場合が考えられる。①連れ子：異性と結婚してこどもをもうけたが、その後離婚して同性パートナーと子育てをしている場合。②生殖技術：精子提供による体外受精や代理出産により、子をもうける場合。③養子：実親との法的な親子関係を終了させる「特別養子縁組」と、実親との関係を保ったまま「養親」として法的関係を結ぶ「普通養子縁組」がある。④里子：養子との違いは、法的な親子関係を結ばず、「里親」として委託を受けて18歳までのこどもの養育を行う点である。

しかし、いずれの場合にも、さまざまな困難がある。たとえば生殖技術を利用する場合、費用や安全性の問題に加えて、子の知る権利、生物学上の父母の権利などの倫理的問題がある。連れ子や特別養子縁組の場合、カップルが共同で子の親権を持つには、同性婚を認める法改正が必要である。里親の場合には、独身でも可能であり、LGBTが里親制度を利用することは法的に何ら問題ない。だが後述するように、運用面で複雑な問題がある。

RFCの活動で念頭に置いているのは、同性カップルによる里親制度の利用である。なぜなら、日本で親になるに際してもっとも困難を抱えているのが同性カップルであり、一方で、法律婚に縛られずにこどもの養育を行うことが出来るのが里親だからだ。

押しつけられる「正しい家族」像

活動していくにつれて藤氏は、里親に関する制度的な問題の根底に、LGBTが「家族」として生きることの根幹にかかわる、根深い問題があるのを痛感するようになった。それが、社会において暗に想定されている「正しい家族」像という問題である。藤氏は「こんなにみんなが、『正しい家族』像を描いていて、人に強要してくるんだ、と思いましたね」と述べる。

「正しい家族」像が表れてくるのは、たとえば制度の運用の場面である。里親制度の運用は、里親の認定／登録（都道府県）→委託（児

童相談所）という2段階の流れがある。法的には、独身でも里親に登録できるが、実際には各自治体が独自に基準をつくっている。たとえば、東京都の里親認定基準を見てみよう。

里親申込者は、配偶者がいない場合には、次の全ての要件を満たしていること。

ア 児童養育の経験があること、又は保健師、看護師、保育士等の資格を有していること。

イ 起居を共にし、主たる養育者の補助者として子供の養育に関わることができる、20歳以上の子又は父母等がいること。

（東京都里親認定基準より抜粋）

上記からわかるように、ここでは原則として配偶者がいること、すなわち法律婚による夫婦であることが前提されている。配偶者がいない場合には、アのように児童養育の経験や資格の要件が付加される。また、イは家族構成に関わる要件であり、たとえば娘とその母親といった家族や、事実婚のカップルがここに含まれ得る。これらの要件はむろん、こどもの養育環境をきめ細やかに考慮し制定されたものである。言い換えれば、「理想の、あるいは正しいとされる養育環境、家族に必要な要件」がここに表れている。

むろん、「正しい家族」像は、単に制度に埋め込まれているのではない。人と人とのやりとりのなかで直面させられることもある。同

性カップルも、これらの要件をすべて満たしていれば、里親になれる可能性がある。しかし藤氏によれば、同性カップルの里親希望に対し、よくあるのが次のような反応だという。「個人的には、あなたたちがいい人だと思うし、里親になってほしい。でも、世間の眼は厳しいからね……」。ここでいう“世間”とは、一体誰のことだろうか。「こどもが混乱するでしょう。いじめられたらどうするの?」。すでに、同性カップルとこどもが「家族」として暮らしていても、である。混乱を心配しているのは、こども本人ではなく“世間”の側ではないのか。藤氏は言う。「(このようにして)理想の家族像っていうのをつくっているわけですよ」。「正しい家族」像を掲げて人と人のあいだに境界線を引き、“世間”を構成しているのは、一人ひとりの個人なのだ。

多様な「家族」を生きる——シアトル視察から

日本において同性カップルで子育てをしている人たちは、もちろん存在する。だが日本では「母親がいて、父親がいて、子がいる、暖かで愛情に満ちた家庭」などという社会規範的な「家族」像が根強いいため、その存在は見えにくくされている。

海外の同性カップル里親の現状に目を向けてみると、アメリカやイギリスでは、同性カップルに向けて積極的に里親・養親の募集がされ、LGBT里親の団体が存在する。「かなりの割合のレズビアン、ゲイっていうのは、普通

に子育てしているし、むしろ頼りにされている」という。藤氏は、2013年に同性カップルの里親に関して先進的なシアトル（アメリカ合衆国）の視察に訪れた。そこには、ごく自然に幸せな「家族」を営む姿があった。そこで出会った、あるレズビアンカップルは、母親、父親といった規範的な性役割や家族役割ではなく、「自分の、個性。個性で育てている」ように見えたという。当初は近所の偏見もあったというが、学校のPTA活動や地域活動に参加して関わるうちに、だんだんと障壁が取れていったという。彼女たちは、レズビアンであることを隠さない。「レズビアンであることが悪いことだと、こどもに見せてしまうことになるから」。

ここで営まれている、性別や家族役割に囚われない「個性」による子育てや、周囲と関わっていくこと＝対話することによって、社会の側のまなざしを変えていくことは、すでに豊かで多様な「家族」を営んでいる人々による、生きていく上での「表現」の技法として捉えることが出来るだろう。それは、多様な「家族」のありようを肯定し、支えていく上で、重要なヒントを与えてくれる。

4 規範化された「家族」観の先へ

麻布乳児院とRFCという2つの事例は、一見すると、相反する立場をとっているように

も見える。施設という場所で、実親との関係を大事にしながらこどもの養育を支えていくとする麻布乳児院。一方、施設養護に偏る現状を里親へと移行し、血縁や性役割に囚われない子育てのあり方を志向するRFC。しかし、それぞれの現場において直面している、社会規範化された「家族」観の問題に照らして考えてみるなら、両者の抱える課題や取り組みの方向性には、通底するものが見えてくる。

規範化された「家族」観は、明治時代以降に作られた「近代家族」の形と合致する。「近代家族」とは、「近代社会において“一般的”、“標準的”な“家族”として認識され、規範化されている家族」⁹である。社会学者の落合恵美子は、「近代家族」の特徴として、(1) 家内領域と公共領域との分離、(2) 家族成員相互の強い情緒的關係、(3) 子ども中心主義、(4) 男は公共領域、女は家内領域という性別分業、(5) 家族の集団性の強化、(6) 社交の衰退とプライバシーの成立、(7) 非親族の排除、(8) 核家族、の8点を挙げている¹⁰。このような「近代家族」は、市場と家族、それらを統御する国家から成る、近代社会における国民国家の基礎単位だった。つまり、「外で働いて家族を養う父親と、家庭を守る専業主婦の母親とのあいだに、両親の愛情を受けてすくすくと育つ子がいる、互いの思いやりに満ちた暖かい家庭」観は、近代国家の要請によって作られていった制度なのだ。

「近代家族」観に照らせば、共働き、単身世帯、シングルマザー／ファザー、LGBTといった人々は皆、「家族」から逸脱した存在として位置づけられてしまう。この規範は、社会のすみずみにまで浸透し、日常生活のあらゆる場面に立ち現れて、“逸脱した”人々の前に立ちはだかる。児童相談所で、自治体窓口で、裁判所で、乳児院で、専門家の話で、書物で、理論で、近所で、“世間”で、“社会”で……。この制度のやっかいな点は、社会に偏在すると共に、私たちの内に内在化されているため、「線を引いているのは誰なのか」が見えにくい点にある。

しかし、現代社会においては、市場のグローバル化、ケアやサービスの経済化といった新自由主義への構造転換にともない、近代国家を中心とした政治や経済発展のシステムは機能しなくなっている。「近代家族」も、その自明性を失いつつあるなか、いまや全世帯の半数近くの人々が、規範化された「家族」観には当てはまらない。にもかかわらず、“国家の再生”、“経済の再浮上”といった社会的要請のなかで、互いに「正しい家族」観を当てはめ、規定しあっているのが、現在の状況なのではないだろうか。

「家族」を経済や再生産の基礎単位と見なすことから離れて、多様な人々が「共に生きる」あり方のひとつとして改めて考えてみるならば、麻布乳児院やRFCの取り組みは、より緩やかな構造を備え、親族による情緒関係より

も開かれたつながりで結ばれた、新たな「家族」のあり方を創造する営みとして捉えることが出来るだろう。

5 「家族である／になる」ことをめぐる「表現」

ここまで、こどもの社会的養護と「家族」のあり方をめぐる二つの事例を取り上げ、考察を進めてきた。ここで、最初の問いに立ちかえてみたい。人々が「家族」であろうと希求する営みのなかにある、多様な人々が共に生きる技法としての「表現」とは、どのようなものだろうか。そしてそのことが、私たちに投げかけてくる問いとは何だろうか。

第一に、それは「家族である／になる」ことをめぐる、多様な関係のあり方と関わっていると考えられる。麻布乳児院のこどもたちが異質な来訪者である筆者に対して見せた身振りには、自己を守り、他者へと向かう、日常の「表現」のありようが感じられた。また、RFC代表の藤氏がシアトルで出会った里親カップルの子育ては、性役割などのあらかじめ与えられた役割関係によってではなく、互いが持っている個性によって営まれていることが示された。二つの事例から示唆される多様な「家族」関係の基盤とは、個と個とのあいだで、互いが関わり合おうとする身振りのやりとりによって立ち上げていく関係であると

言えるだろう。このミクロな「表現」は、日々の生活の営みにおいて、個と個である人々が「家族」であろうとする、関係のパフォーマンスと言いかえることが出来る。

第二に、日常生活におけるミクロな「表現」——「家族」であろうとする人々による関係のパフォーマンス——を支える環境を創り、整えていくことである。麻布乳児院では、「みんなで見えていく」という子育ての考えに、親と子、施設と地域との境界を開き、こどもが育つことを中心とした関係をつないでいこうとする意図が感じられた。シアトルの里親カップルは、地域と関わり対話することによって、周囲のまなざしを変えていくことを実践していた。両事例からは、ミクロな「家族」関係を育んでいくために、地域や社会へと関係をひらき、社会の側のまなざしを変えていくことの重要性が示唆された。このことは、社会に向けたマクロな「表現」として捉えられる。実際には、規範化された「家族」観には根強いものがあり、社会のまなざしの変容は容易いことではない。しかし、たとえば別の論考で取り上げている「井戸端げんき」や「元子おばちゃん家」の事例からは、「家族」であろうとする人々の多様な関係性を育み、支えようとする場のありようを思い描くことが出来る。

「家族」というものが、人間が生きていく上での根源的な基盤なのかどうかはわからない。もしかしたら「家族」というメタファーは、人が誰かと共に生きていく、一つのあり方に過

ぎないのかもしれない。共に生きようとする人どうしが、多様な形で共に生きていくことが出来ること——「なりたい人どうしが、家族になれる社会」とは、そんな共生の場の、一つの「表現」のかたちではないだろうか。

- 1 女性同性愛者(レズビアン)、男性同性愛者(ゲイ)、両性愛者(バイセクシュアル)、性別越境者(トランスジェンダー、性別違和など)を含む、性のあり方が多数派とは異なる面がある人々の総称。RFCでは、「性的少数者」「性的マイノリティ」とほぼ同じ意味で用いている。
- 2 『広辞苑』第6版、2008
- 3 厚生労働省ウェブサイト
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/syakaiteki_yougo/(平成26年12月17日アクセス)
- 4 厚生労働省「社会的養護の現状について」平成26年3月版
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/syakaiteki_yougo/(平成26年12月18日アクセス)
- 5 同上
- 6 平成24年3月末、家庭福祉課調べ
- 7 平成26年7月、乳児部会調べ
- 8 平成25年度の入所時のこどもの年齢は、0～1カ月以内13.5%、1～3か月未満15.2%、3～6か月未満6.8%、6か月～1歳未満 17.0%、1～2歳未満40.7%、2～3歳未満6.8%(「慶福育児会麻布乳児院概況」平成26年6月30日)
- 9 米村千代(2012)「近代家族[一般]」、『現代社会学事典』、大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編集委員・見田宗介編集顧問、302-305頁
- 10 落合恵美子(1989)、『近代家族とフェミニズム』、勁草書房、18頁

麻布乳児院

何らかの事情により家庭で養育できないときに、保護者に代わって乳幼児を養育することを目的とする児童福祉法による乳児院。保育士、看護師及び児童指導員による小グループ担当制をとり、個々の乳幼児の心と体の成長に合わせて基本的な生活習慣が身につくよう家庭的な雰囲気の中で養育を行っている。

RFC(レインボーフォスターケア)

2013年設立。「LGBTも里親に」という問題提起を中心として、里親制度を含む社会的養護に関わる人々と社会的養護に関心のあるLGBT当事者・LGBT支援者の人々をつなぎ、LGBTが社会的養護の重要なリソースとして認知される社会の実現のため、様々な活動を行っている。 <http://rainbowfostercare.jimdo.com/>

「多様性と境界」、そして「迂回路」——LGBT 里親の壁

藤めぐみ

昨春秋、「多様性と境界」に対する対話と表現の研究所」という長い名前のNPOから調査依頼があった。「東京迂回路研究」というプロジェクトの一環で私代表を務めているRFCの聞き取りをし、後日哲学カフェのテーマに取り上げたいとのことであった。「東京迂回路研究」とは、「調査・研究・対話を通じて“生き抜くための技法”としての『迂回路』を探求する」活動だそう。

私は、この「多様性と境界」と「迂回路」というキーワードに大きく心を揺さぶられた。今まさに、私が直面している課題そのものであったからだ。

RFCの活動は2012年にさかのぼる。事例報告のとおり里親制度の勉強会にLGBT当事者が参加し、その翌年に「里親の候補としてLGBTを『活用』する」という目的を掲げて団体を設立することになった。「里親が足りないなら、法律婚をしている異性カップルだけをターゲットにするのでなく、同性カップル（戸籍上の性別変更をしていないトランスジェンダーの方が当事者のケースも含まれる）も人材としてとらえることができれば社会問題の解決につながるのではないか」という発想からスタートしたのである。「育てる大人のいないこどもたち」「こどものいない大人たち」がつながっていくイメージだ。同性カップルは生物学上その二人と血がつながったこどもを持つことができない（生殖補助医療を用いることになる）ので、不妊治療を長く続けたあとの夫婦や子育てを終えた夫婦などと異なり、20代などの若いカップルが里親に興味を示してくれるのではないかという期待もあった。

そんな思惑から始まった取り組みなのだが、私はある壁にぶつかることになった。それが事例報告にある「正しい家族」像である。行政関係者、教育関係者、政治家、福祉関係者、里親、児童養護施設経営者

……さまざまな分野の方々に「LGBT里親」の話をしてきた。「それは素晴らしい取り組みですね」という言葉もあったが、半数以上からは「それって『家族』なの？」という問いが返ってきた。

彼らに説明するときには「LGBTとは」から説明しなければならない。RFCのミッションは「LGBTも里親に」なのだから、「LGBTとは」からはじめるしかない。自らの性別の自認が身体の性別と異なる（性別違和のある）人がいること、性的指向が同性の人もあること……そういった説明をした後で「そんな彼らも里親に」という流れで話をする。そこで返ってくる問いが「それって『家族』なの？」である。実に高い壁だった。「正しい家族」がしっかりと頭に刻み込まれている人たちにとって、私の説明は「LGBT＝家族から逸脱する人たち＝正しくない家族」を示しているにすぎないらしく、少しも彼らの心を動かせなかった。くっきりと「正しい・正しくない」という境界を作っている人に「LGBTとは」の説明することは、説明のスタート時点で私が「境界」を示す（むしろ強化する）作業をしていることになる。「境界を消すために境界を用いて説明する」、このジレンマで私は苦しんでいたのである。

RFCの活動をするなかで私は様々なセクシュアリティの人と出会った。そこで改めて認識したのはセクシュアリティの「多様性」だった。「LGBT／セクシュアルマイノリティ」などとざっくりと括られる人のなかにもセクシュアリティは人の数だけ存在するのではないかとさえ思った。さらに、マジョリティ（つまり性別違和もなく性的指向が異性である人）に属するとされる側の人のなかにおいても、多くの人と対話してみると、人それぞれ、セクシュアリティすなわち性のあり方や性への向き合い方が微妙に違っていた（たとえば「好きになる性別」という言葉一つ

でも「好き」の定義は実にばらばらであったし、「好きな相手とセックスしたい相手と結婚したい相手は全部違いますよ」という人もいた）。多くの人と語れば語るほどセクシュアリティの多様性にただただ圧倒された。そして、だんだん私は「マジョリティ／マイノリティ」の境界など本当は存在しないのではないかという思いにとらわれていった。そこにはグラデーションがあるだけなのではないか、と。それはまた「家族」のグラデーションともリンクした。多様な人々がつくる多様な家族。そこには境界など存在しないのではないか、と（調査後に開かれた哲学カフェにおいても「あなたにとっての家族とは」という問いかけがなされたのだが、参加者の数だけ「家族の形」があることを再確認したのであった）。

多様な人々が広がっているこの世の中で境界をつくる意味って何だろう。境界を消したくて活動している私が境界を用いてしか説明できないジレンマからどう脱したらいいのだろう。そんな悩みのなかの「多様性と境界に対する対話と表現の研究所」の「東京迂回路研究」の調査依頼だった。

「調査」といえども、それは一方的なものではなく、研究所の皆さんとじっくり対話する時間となった。そのなかで、多様性と境界のはざまで苦しむ私の悩みを聞いてもらい様々な新たな視点を共に生み出す機会をいただいた。事例報告に「ヒント」と紹介されているシアトル視察で出会ったレズビアンカップルの家族の話は一つの例であろう。彼女らは境界を作ろうとする人々のなかであって、地域で「ふつう」の家族の営み（PTA活動、地域活動など）を地道に続けていくことで境界を一つひとつ丁寧に取り払ってきたのではないか、という視点が対話のなかで生まれてきた。このシアトル視察については様々なメディアや講座で何十回と紹介し続けてきたのである

が、今回、「境界」というキーワードを意識させられたことによってRFCの活動を新たにとらえ直すことができたのである。RFCの活動は、境界を用いて説明する作業と同時に境界を取り払う作業を続けてきたのではないかと。

それはすなわち、「自分と『違う』人がいるということ」「『違い』とは、『こっち（正しい）』と『あっち（正しくない）』を隔てる『境界』ではなくて、一人ひとりが違うという『多様性』なのだということ」を示し続ける作業である。「境界を示して、壊して、多様性を示す」作業である。

「それって『家族』なの？」に、「『家族』なんです」と粘り強く答えていく作業はこれからも続くだろう。ジレンマを抱えながらもその作業は続けていかねばならない。「こどもたちのために『正しい』家族を探す」という手っ取り早い最短距離の解決策ではもはや問題は解決しないのだから。

多様な人々が作ろうとする多様な家族の形を示すこと。それはこどもたちが生き抜くための迂回路、多様な人々が生き抜くための迂回路を示すことでもある。RFCの迂回路探しはこれからも続く。また機会があれば研究所の皆さん、哲学カフェの参加者の方々と対話をしながら、ともに迂回路探しをしたいと願っている。

ふじめぐみ

RFC代表。1974年生まれ。大阪育ち。2013年9月のIFCO（国際フォスターケア機構）世界大会では、RFCのプログラム「日本のLGBTと里親養育」が採用され、58のワークショップ中で唯一「LGBT」をテーマにしたワークショップを開催した。家庭を必要とするこどもたちのために、LGBTを人的資源として活用することを提言している。

「場」をめぐる「境界」

——2つの「居場所」から見えるもの

長津結一郎、三宅博子

はじめに

——「みなさん、知っていますか？　ここ伊豆大島は東京都なのです」

「もやもやフィールドワーク 調査編」の調査先を探っていたときに、ふとインターネットでこんな文字に行き当たった。23区・多摩・そして島嶼部。東京の「迂回路」を探るには、ぜひ島嶼部を訪れなくては、という、ある種の義務感のような遊び心から検索していたときに、不意に見つけたこの言葉。吸い寄せられるように先を読み進める。

「子育ての環境は子ども家庭支援センターや保育園、学童保育などが整い、子育てにもやさしい島です。しかし、公園などの遊び場が少ないことや、転勤者など島に身寄りがない人は一人で子育てを頑張らざるを得ない状況があります。そこで何かできないかと始めたのが、『元子おばちゃん家』です」

伊豆大島にはこれまで、訪れたことはなかった。転勤者が多いというのは、何となく想像が付く。ただ、子育てにやさしい島というイ

メージもピンとこず、観光で訪れるようなところとしかイメージが湧かない。まったく、事情がわからない。興味が沸く。

調査をさせてほしいということで、ウェブサイトを書いてある電話番号に電話してみるのが、なかなか出ない(後になって聞いてみると、その時期はたまたま不在がちだったそうで、普段地元の方とは携帯電話でやりとりしているらしい)。ますます興味が募る。一方で、伊豆大島行きの船を調べ始めたところ、東京文化発信プロジェクト室のスタッフから、宿泊施設は災害復興支援のためのキャンペーンで安くなっています、との案内を受ける¹。ふと思い起こしてみると、確かに伊豆大島の災害について報道されていたような気がする。2013年の台風で甚大な被害を受けていた伊豆大島。しかし、東京に暮らす身にとって、なにか遠いことのように感じる。電話は、なかなかつながらない。ウェブサイトをたどると、近隣のダイビングショップを利用する人がこどもを預ける場所として、「おば

ちゃん家」を使っていることを知る。ダイビングショップに電話すると、「おばちゃん家」までわざわざ見に行ってくれるという。そしてショップの店員さんから電話。「電話に気づかなかったみたい。おばちゃんのほうから掛けるってよ」。

ようやくお話できた「おばちゃん」。主旨を説明すると開口一番、こんな言葉が。

「そんな～、私のやってることなんて、ただの“おばちゃん”がやってることだよ？」。

この言葉はその後、訪問してからも幾度となく聞くことになる。細い糸をたどってようやく結びついた、100kmの距離にある「東京都」の現実。

半年後、今度は千葉県の本更津市におじゃますることになる。「東京」迂回路研究、という事業名にもかかわらず、特筆すべき希有な事例なので訪れることにした、千葉県にある「井戸端げんき」。宅老所と自らの活動を称するこの活動は、お年寄りのための介護施設というイメージとはまったく一線を画した、一言では言い表すことのできない不思議な空間である。

その「場」におじゃました瞬間のことは今でも忘れられない。ドラマ「木更津キャッツアイ」のキャラクターが大きく描かれた地元の朝採り市場の壁を目印に、建物の脇をすっに入っていくと、「ようこそ井戸端げんきへ」の看板が見える。もともと住んでいた方は夜

逃げでいなくなっただけ。大きな一戸建て住宅の玄関扉を開けると、「Welcome to 井戸端げんき」という大きな手書きの文字が迎えてくれる。

居間に入ると、20人近くの方が、うごめいている。テレビを見ている人、寝ている人、その横でテレビを見ている人、犬をなでている人(犬の名前は「おしるこ」というらしい)、本を読んでいる人……渾然一体としていて、誰が「利用者」で、誰が「支援者」なのか判然としない。

施設長の加藤さんに話しかける。「こんにちは、多様性と境界に関する対話と表現の研究所です。今日はありがとうございます。まずは施設を見学……」などと言いかけたときに、言葉を投げかけられた。

「いいから、とりあえず、こたつ入ってください。ね。寒かったですよ」。

この言葉で促されてから2時間、こたつを一步も出ることなく、インタビューになだれ込む。というより、加藤さんが一方的に話を始め、そのお話のあまりの淀みなさに、こちら聞き入るのが止まらなくなってしまった、というのが正しいかもしれない。と同時に、こたつから、この「場」のもつ空気感を十分に感じることになる。

誰が誰のためにそこにいる、というわけではない。ただそれぞれがそこにいる、という空気の流れる時間。かといって、それぞれが無関係にただそこにいるわけでもない空間。

さて、この場は、いったい何なのだろうか……？

上記は、「伊豆大島・元子おばちゃん家」と、「宅老所・井戸端げんき」という、二つの調査先におじゃまる場面の記述である。本稿では、この2つの事例を取り上げ、多様な人々と共にある「場」について考察する。その際、その「場」のなかにいかに多様性を担保するか、そしてその場をどのように下支えするか、ということを中心に据えながら筆を進めてゆきたい。

「おばちゃんだから」

――伊豆大島・元子おばちゃん家

2009年にオープンした「元子おばちゃん家」。ここは、託児所であり、小学生にとっては放課後の居場所であり、近隣のおじいちゃん・おばあちゃんには憩いの場であり、観光客には子どもを預かってくれる場所でもある。このように「元子おばちゃん家」とは何か、と語ろうとすると、たくさんの要素が思いついてしまい、ひとつの言葉で捉えるのが難しい。それもそのはず、この場所を運営している長嶋元子^{もとこ}さんは、これまでの制度的枠組みではできないことに挑戦し、あえて逸脱することを狙っているのである。

伊豆大島で保育園の園長として長年勤務していた長嶋さんは、「保育園ではできないことに歯がゆさを感じていた」という。保育園

で取り扱う時間を過ぎたあとは子どもを預かることができないという仕組みや、職員数の配置基準などの制約に対して、「ルールじゃないところで、おばちゃんみたいな人がやってあげたかった」と語る。子どもを「保育園」という枠組みではなく、「自分」で預かる、ということができると、より利用しやすく、お母さんたちにとって暮らしやすくなるのではないかと考えたのである。

そこには、伊豆大島特有の事情もあった。東京都の官公庁²からの転勤者が伊豆大島に在住するケースは少なくない。地域に知り合いもおらず、身よりがない人は、保育に困っているケースも多い。親一人子一人の世帯で、他の島への出張をしなければならない親は、親類に子どもを預けるためにわざわざ本土に行き、その足で他の島へ行く、ということをしている場合もあるという。そのような状況で長嶋さんは、「昔、隣のおばちゃんがやっていたこと」を実現しようと試みたのだ。

ちょうど保育園の仕事を早期退職したタイミングだった。親類がかつて民宿を経営していた建物に、賃貸利用の希望が入った。「どうせ貸すくらいなら私が使おう」と、退職金をつぎ込んで改装し、自力で場をつくった。「退職金使っちゃって、今なくて本当に困ってんだけど。ははは」と快活に笑い飛ばす姿が印象に残る。

長年伊豆大島で働いてきたなかで、つながりは多かった。保育園時代の教え子たちには、

お母さんとして島に暮らしている人も多い。「そんな場所を作ったなら、園長先生、うちの子どもも見て欲しい」と要望が集まる。そこで長嶋さんは、お母さんたちに相談して自分たちで料金を決めてもらい、「元子おばちゃん家」を開いた。すると、このような場所が必要だ、と考えていた保育士さんが現れ、ボランティアで手伝ってくれることとなった。「出張に行く人の子どもの泊まりとか、『いいよ、一晩ね』と言っておばちゃんの家に泊まることにして。ただ、無料だとお互い遠慮があったり、『知り合いなら見てくれるけど、全然知らない人は頼みにくい』みたいなことになったりしないように、一泊いくらと決めて」。

こうして次第に、“おばちゃん”独自の取り組みが注目を集めるように。「だんだん人が増えてくると、あたしがもう年で辞めたときに、この事業が潰れちゃったらおしまいなので、同じような気持ちを持った人が続けていくようにするにはどうしたらいいかなーみたいなことを考えていたときに、役場が拾ってくれて」と長嶋さんは教えてくれた。大島町役場が紹介したのは「保育ママ」という制度³。未就学児の子どもを預かる事業者に対して補助金が出る制度で、預ける側の負担が少なくなる仕組みだ。この制度は、自宅などの場所で個人的に子どもをみる保育者を想定しているが、長嶋さんは、「元子おばちゃん家」を拠点として登録できるよう役場と相談をした。

現在は役場や子ども家庭支援センターから公的に紹介を受けて「元子おばちゃん家」を利用するケースが増えている。

また、「元子おばちゃん家」が小学生の集まってくる場所として機能しはじめたころ、役場の職員が東京都の放課後サポート事業⁴を紹介してきた。伊豆大島の南部・中部には1か所ずつ置かれていた放課後サポート事業の拠点では、小学校を下校して帰宅する前に立ち寄る学童保育を行っている。本来は学校の空き教室などを利用して行う事業だが、東京都との相談のなかで、この場所でも大丈夫だろうということで、現在は「放課後子ども教室 たんぽぽ教室」という大島町の委託事業として展開されている。

こうした、保育ママの制度と、放課後サポート事業の制度の2つを併せもった複合施設、というのが「元子おばちゃん家」の実態なのである。

しかし、それだけではない。

ダイビングにきた子連れの観光客が、ダイビングしている間に子どもを見ってくれる人がいないため、ダイビングショップで自主的に子どもを預かっているという話を聞いたスタッフが、「おばちゃん、預かってみたら？」と持ちかけてきた。長嶋さんは「ちゃんとした施設じゃないし、必ずダイビングショップの人が『おばちゃんだよ』と説明してくれれば…ね。おばちゃんだし、ちゃんとした施設じゃないよ、と仲介してくれるならいいよ」と話し、

ダイビングショップと提携して窓口になってもらっている（現在は島内5箇所）。また、こうした経緯を知っている人から、次から次へと申し出がやってくる。「ウチの娘が本土から帰ってくるんだけど、ここで使ってくんない？」と言われれば「助かる、助かる」と受け入れる。趣味で囲碁をやっている人に「小学生に教えたいんだけど」と言われれば「じゃあ、どうぞ来てください」と答える。「絵手紙を教えたい」と言われ「こどもたちだけじゃもったいないから、お父さんやお母さんも来て」と案内したら、毎回のように参加するようになったおじいちゃんもいたという。口コミで、さまざまな人が集まっているのだ。

このように「元子おばちゃん家」では、複数の制度を同時に運用しながら、どの制度でも賄えない私的なサービスも並行して実施していくスタイルをとっている。17時半までは「たんぼぼ教室」、それよりあとは「元子おばちゃん家」というように、まるで看板を付け替えるように姿を変えながら、日々の運営を回していく（実際、建物の入り口には「たんぼぼ教室」と「元子おばちゃん家」の2種類のカレンダーが掲示されてあった）。

さらに興味深いのは、冒頭にあった「私のやってることなんて、ただの“おばちゃん”がやってることだよ？」という言葉である。「あたしのやれる範囲でやれる分には、極端に言うのと、嫌になったら『やーめた！』って言えばいいわけじゃない？」「なんも我慢してないの、

あたし」。と語る長嶋さん。それでも、たとえば長嶋さんのお孫さんが熱を出したときに利用の申し込みが入ったときなどは、すぐに別のスタッフを呼び寄せて、利用者が困らないように手を尽くしてから、孫のもとに向かうという。このような態度からは、制度的な枠組みから自由になる土壌として“おばちゃん”像を巧みに利用している面がうかがえる。それは、制度から自由になり、柔軟な対応を志したり、その逆で個人的事情で運営に可変性を持たせることができるという効果もある。

ただしそれとは異なるもう一つの側面も見逃せない。先のダイビングショップとの提携のエピソードで、ダイビングのほか、観光旅行に來た若い夫婦がこどもをあずけてドライブにいく、という事例もあることを紹介しながら、長嶋さんは、こうつぶやいた。『旅行に行くのにこどもと一緒に楽しむのが当たり前だろ』みたいな、なんて言うのかな、それで楽しい方がいい（という価値観）みたいなのがやっぱりね。でもそこでちょっと、ガス抜いてあげると、涙も出るほど嬉しいと思うんだ。「おばちゃん」という名前を纏うことで、世間一般の価値観ではなく、自らのリアリティに基づいた運営手法を試行することができる。旅行はこどもと一緒に家族でするのが当たり前、という押し付けではなく、私が困っているあなたにできることがあれば、という、隣人としての視点によって、場が成り立っているのだ。

「元子おばちゃん家」で過ごす時間は、こどもたちと、その背景にあるさまざまな事情ひとつひとつを受け入れ、それらを「できる範囲で」ケアし、制度にうまくあてはめながら、地域のなかに小さなシステムをつくるような時間であった。それを下支えしていたのは、まず“おばちゃん”である「自分が」必要だと思ったことを、独力ではじめることと、それを制度と結びつけ、まちにつなげる姿勢である。「もらえるものはなんでももらう。それがお母さんのためになるから」と語る長嶋さんの口調が印象に残る。できないことはやらず、「おばちゃんだから」個人でできる領域を超えないで、自らのリアリティを信じて行動する。そのことが、さまざまな背景を持つ立場を共存させる仕組みをつくりあげている。

「徘徊も、犬を連れれば散歩です」

—— 宅老所「井戸端げんき」

元子おばちゃん家が「こども」を中心とした場とすると、井戸端げんきは「お年寄り」を中心とした場ということになる。中心とした、と言うのには少し事情がある。

千葉県木更津市、JR木更津駅から5分ほど歩いたところにある井戸端げんきは、地域密着型の通所介護事業所（デイサービス）である。井戸端げんきが名乗る「宅老所」は制度的名称ではなく通称であるが、全国に複数存在する。「民家もしくは民家に近いつくりの生活感あふれる建物を利用して、少人数（多

くても15名以内）のデイサービス、場所によっては宿泊も行える多機能型の福祉施設」というのが大まかな定義といえる⁵⁾。

ところで、高齢者施設に向けられるイメージというのは、ある程度画一的ではないだろうか。清潔な施設で、エプロンをした施設職員がおり、音楽や造形、食事など、時間ごとに決められたプログラムを行う。しかし、こういったイメージとは真逆の空間が、この井戸端げんきには広がっている。

二階建ての民家の一階部分を利用し、二間続きの和室に集い、日中の生活を送っている。ものが多く、生活感がある雑然とした空間である。私服で過ごしている職員たち（と思われる人々）がプログラムを提供しているそぶりはない。その居間のど真ん中に掘りごたつが置かれており、私たちはそこに案内されたというわけだ。

もっとも特徴的なのは、利用者やケアスタッフだけでなく、多くのボランティアや、利用者の家族、近所の人、通りすがりの人などが訪れるため、誰がどの役割でその場にいらのか判断としないことである。この「誰が誰だかわからない」という状態は、意図的なものである。

「明確になっちゃうとね、居心地は、よくないよね、と俺は思うから。基本的に別に誰がどうでもというか、おじいちゃんおばあちゃんからしたら、誰がボランティアで、誰が職員で誰がパートでとかそんなことどうでもい

いです、別に。手を差し伸べてくれるかどうか、とか、そばにいてくれるかどうか、ってことだから」と話すのは施設長の加藤さん。そして、誰が誰だかわからない空間であるがゆえに、「誰でも受け入れる」空間でもある。

ウェブサイトにはこのような文章が記載されている。「介護度が重く対応が難しいとされている方や大勢の利用者のなかでのデイサービスが向かなかった方、知的障害や身体障害などにより日中の在宅生活に不安のある方、その他学童まで受け入れます。井戸端げんきを必要とされている方であれば、介護保険適合利用者として、実費での利用者として、ボランティアスタッフとして、通り返りの旅人？ として誰もがご利用することができます」。この思想の背景にあるのは、「ここじゃないとだめだ」という人がある、ということである。「うちじゃないと駄目っていうんだったら、それはやっぱり受け入れるしかないなと思うから」と加藤さんが話すように、実にさまざまな人を受け止めるために、さまざまな枠組みを用意している。

そしてこの空間では、決められた生活時間や、過ごし方といったものはない。利用者それぞれのペースに合わせた日課や過ごし方に寄り添っている。プログラムなどは一切ない。そしてそれを支える職員も、決められた「業務」ではなく、利用者の日課に合わせて行動したり、自らのやりたいことをしながら1日を過ごしている印象を受けた(加藤さんは「今日は、

ちょっとなんか、インスタントな気分だったから」と、みんなで食べる昼食にインスタントラーメンを選んだという)。

このような場の空気は、いくつかの特徴的な工夫によって成り立っている。

1つめは、ケアの現場でありながら、利用者個人を支えるのではなく、利用者一人ひとりの「暮らし」を支えるという視点である。この場所を利用する人の多くは、本人の要因で「ここじゃないとだめ」な事情を抱えていることも多いが、家族に何かしらの事情がある場合もある。そのため、本人と向き合っていくなかでは、全体的なアプローチが必要となる。「おじいちゃんおばあちゃんを見れば、その人の生活が支えられるかって、全然そんなことない。その人の能力とは全然関係ない。じゃあ何かっていったら、その人の暮らしを考えなくちゃいけない。暮らしてのは、本人だけじゃなくて、家族があったり仲間がいたり、住んでる場所があったり、時間とか、いろんなことのなかで、成り立っている。そういうことにアプローチしていかなくちゃいけない」と加藤さんは話す。

2つめは、「ケアをする／ケアをされる」という関係性ではなく、お互いが「共にいる」という視点だ。ケアという視点ではやはり、ケアする側とされる側の立場の差が必要になってくる。しかし、この場に居合わせたさまざまな背景の人々は、そうした立場の差異とし

ての境界線では言い表せない機能を持っているという。加藤さんは、お互いの立場が「どういうふうになるか、と考えると、いろんな人がごちゃっといることがとてもいい」と言い、『『ただいてくれる』だけで助かるし、心強い(という人もいる)。『ただいてくれる』っていう人、いないから。……今あそこに寝ているおばあちゃんも、何人の人を社会復帰させたか』と話す。そしてその視点は、「ケア」という言葉自体のありようにも疑問を投げかけることにもつながる。加藤さんは、この場の状態について、「ケア」ではなく「許す」という関係である、と言い表したのが印象的だった。「じっくりくるのは、『許す』。そのありようを許す。そのままのことを許す。そういうふうに過ごすことを許す」。そのような、お互いがお互いを許しながら「共にいる」という関係性が生起しているのである。

3つめは、そこにいる一人ひとりが、場における「役割」を持っているという視点である。認知症の症状のひとつにある徘徊も、「犬を連れれば散歩です」と加藤さんが話していたように、それぞれの行動を問題行動として捉える視点ではなく、それぞれの行動の意味や、場のなかでの位置づけを考え、周囲が適切にふるまっていく。その際の場における「役割」とは、「この人がいるから生きていける、みたいなことですよ」と加藤さんは説明した。あらかじめ割り当てられた役割や肩書による関

係ではなく、個と個の関係を結び直していくような視点で関わっていくのだ。

このような場は「宅老所」と呼ばれ、全国に数カ所独自の運営を通じて点在している。「井戸端げんき」はそのなかでも先駆的な場所と言えるが、この場所を創設した伊藤英樹氏はこの場所を称して、「僕をも含めて、希望を失った人たちが、ただ、生きていくために集った場所」と言った。自らの父親の介護に接して、理想の介護のあり方を求めて立ち上げたことが「井戸端げんき」のはじまりだったという。書籍や映画などを通じて紹介されるその姿は、紋切り型の「福祉施設」とは縁遠い姿を見せつけている。

その根底には、介護という事象が単に介護だけの問題ではない、という考え方がある。「(介護に) いちばん近いのは、環境保護運動だと思う」と話す加藤さん。「日本は個ではなく、共同体を大事にする。日本には日本の文化と暮らしがあって、木更津には木更津の文化と暮らしがあって、そのなかでみんなが生まれて育っている。そのなかで、文化・暮らしを守る仕事」だという。

ウェブサイトには「宅老所」の説明としてこのような言葉を目にすることができる。「本当のところは『地域住民の必然によって生まれ、必要性の変化に応じてサービスを提供する(提供しあう) 定義不可能な生活施設』ではないか」。すなわちこの施設はもはや、「お年

寄りのための」ものではない。介護者が高齢者に対して「ケアする（してあげる）」視点ではなく、コミュニケーションを通じて「許し」、「共にいる」という視点をもつこと、そのことに高齢者たちも巻き込まれながら介護者たちを巻き込んでゆくこと、そして、それぞれの関係性が、あらかじめ与えられた役割や肩書による関係から、「個」と「個」の関係性に結び直されること。そのことを通じて、独自の「生態系」のようなものをつくりあげること。最初に感じた、「ただそれぞれがそこにいる、という雰囲気、時間」「それぞれが無関係にただそこにいるわけでもない（ような気にさせる）空間」という印象。言い換えると「もわもわした何かがあふれている」、「ふるまいに満ちた空間」は、このようにして、コミュニケーションと身振りのさまざまな関係性によって成り立っているのではないか。

小括

伊豆大島を舞台にした「元子おばちゃん家」と、千葉県木更津市を舞台にした「井戸端げんき」。できた経緯も文脈も一見まったく異なる2つの「場」について、「迂回路」を考える上でいくつかの知見が見出される。1つは、本書で取り上げる他の事例にも共通するかもしれないが、制度からの逸脱や再解釈が起こっている点である。既存の保育施設でまかないきれない部分へのニーズを感じ取った長嶋さんは、既存の制度をうまく使い

つつ、そこからうまく逸脱して、さまざまな想いを汲み取る場を構築していった。また、井戸端げんきは「理想の介護」を目指して、ただ「共にいる」ことを介護とするような、これまでの福祉の考え方ではありえなかった手法で施設を運営していた。そのうえで福祉施設ではなく、「定義不可能な生活施設」と自らを称することで、既存のあり方を再解釈するような動きも起こっている。こうした制度への向き合い方を通じて、これまで制度からこぼれてしまった人々と共に歩んでいくことを指向している。

もうひとつは、「個」としての向き合いである。自らを“おばちゃん”と言い切る長嶋さんが、自らの責任範囲を明確に「公的な存在」としてではなく「私的な存在」としてアピールすることで、関わり合うそれぞれの立場の「個」の存在やそれにまつわるさまざまな事情の表出を許しているように思われる。井戸端げんきにも同様に見られるこのような傾向は、あらかじめ与えられた役割や肩書による関係から、「個」と「個」の関係性に結び直す機能を持っている。

さらにもうひとつ特徴を付け加えると、ここにしかない空気感をつくる、というのも重要な点である。長嶋さんは、いつまでもお話を伺っていたいような魅力にあふれた人である。ハエたたきをしながら、電話に中座しながら、じっくりとこちらのお話に付き合ってくれるというその姿勢、自らの行動を優先

しながらも「共にいる」という態度の一端を、インタビューを通じて知ることができた。また、井戸端げんきでは「湯あたりならぬ”場あたり”」するような感覚におちいった。そのなかにいるとたいへん居心地がよいのだが、そこから一歩外に出て日常に戻ると、内と外との体感としてのギャップに苦しむ。それほどに井戸端げんきの空間が、ある種の濃密な、凝縮された空間なのであろう。

長嶋さんは、私たちの研究所の名前に反応して、こんな話をしてくれた。「なんの境界もないのがウチかな。だから言ってることはすごくよくわかる。あんまりこう、いろんな枠のない形ってものをやりたかったの、ここではね。だからなーんにも規定がない」。また、加藤さんはこんな言い方をしてくれた。「世間的にはきっと迂回路なんだけど、俺は、もうこの道しかないから本道なんだろうね」と。既存の枠組みや考え方を外したところに、柔軟に揺れ動く境界線をあえて当てはめること。外と内とのギャップを確信犯的に内包しながら、それぞれにとっての道を「個」の視点から追求すること。2つの事例からは、そのようなプロセスで作られた、新しい「迂回路」を見出すことができるのではないだろうか。

- 1 2013年10月、台風26号が猛威を振るい全国に甚大な被害をもたらす。伊豆大島では、36人が死亡、3人が行方不明となっている。ほか、負傷者や建物被害が多数発生した(被害状況は平成26年9月現在)。(「大島町復興計画」参照)
- 2 伊豆大島には、東京都総務局大島支庁や法務省伊豆大島区検察庁、法務省東京法務局大島出張所など、国や東京都の施設が点在している。こうした施設に勤める人々の多くは転勤で島を訪れてしばらく住むことになるが、ふたたび転勤で島を去ることも多いという。
- 3 保育ママとは、両親の就労等で保育に欠け、かつ保育所に入所できない小学校就学前の児童を保育者の居宅等で保育する通所の施設、又は保育者の通称である。大島町では、町が認定した家庭的保育者として、少数の乳幼児を保育している。
- 4 放課後子ども教室は文部科学省の所管として、安心・安全な子どもの活動拠点として地域住民が参画して、学習や体験・交流活動などを行う社会教育事業。すべての小学生が対象となり、原則としては学校の余裕教室で行われている。大島町では放課後こども教室推進委員会」により、元子おばちゃん家のほか小学校や地域センターで運営されている。
- 5 井戸端げんきウェブサイトより引用。http://members3.jcom.home.ne.jp/idobata-kaigo/

大島 元子おばちゃん家 30年以上にわたる保育園勤務の経験から、子育て支援を実現する場として2009年に開設。赤ちゃんからお年寄りまで、在住者も観光客も、いろいろな世代、立場の人たちが困ったときに助け合い、交流し楽しいことが共有できたらという考えのもと、「一時預かり場所」や「放課後の遊び場」として運営されている。
井戸端げんき 千葉県木更津市にある宅老所。2002年より、民家を利用した地域密着型の通所介護事業所として運営。利用する人、一人ひとりの暮らしを大切に、その家族、スタッフ、ボランティア等が、楽しさを分かち合えるような関係を目指している。井戸端げんきを必要としている人であれば「いつでも誰でも受け入れる」場所。

ひとりぼっちたちの居場所

加藤正裕

このコラムを書いている今日もいつも通りの暮らしがそこにある。最近あった出来事といえば、おしるこの散歩に付き合う人が変わったこと（中年の男性同士が手をつないで公園で犬の散歩をするのだから面白い！）。あと、たくさんの人を社会復帰させてきたばあちゃんが旅立っていった（10年以上も一緒にいたから寂しいー）。でも、そんなことがあっても何があってもみんなの暮らしは変わらない。ケンカしたって泣いたって誰かが死んだっていつも通りにみんな生きているんだ。

『いつも通り』って何も変化がなく今まで通りかってそうじゃないんだよね。みんな刻々と変化をしていく。老いたり、育ったり、文化社会が変わったり、なんだかんだ忙しいもので、変化に合わせていかないと『いつも通り』って維持できないんだよね。井戸端のジジババは気付かず老いていく。だからボクからも気付かれないように老いに合わせて変化していく。だから「いつも通りだね」とか「変わってないね」とか言われると嬉しいんだ。それはボくらが上手に変わっているってことだからね。

話はコロって変わるけど、ボクは不器用な生き方しかできない人間なんです。東京で音楽やりたくて両親に介護やりたいと嘘ついて都内の某専門学校に入学してろくにバイトもせずにロック三昧な日々、専門学校は卒業できたけどニートになって行き詰まって飛び降りようとした埼玉県和光市の線路にかかった高架橋。死にたい気持ちでいっぱいだったけど体が震えるくらいビビっていたのは生きたいからだって気づいたときに泣き崩れ、実家に帰ろうと決意して夢のようで実は逃げ道だったメジャーデビューを諦め帰ってきた地元で探した仕事が介護だった。介護の仕事で初めて教わったことはオムツでもお風呂

でも食事でもなく、ポケたばあちゃんの縛り方だった。『いやだよーいやだよー。』って苦しそうな声で訴えてくるばあちゃんをボクは縛れなかったんだけど、それを見た看護師さんが『仕事だからやってもらわないと困る！』って言ってきた。仕事と割り切れるような器用な人ならできるのだろうけどボクは『縛るくらいならぶん殴られた方がマシです。』って言った3日後にクビになった、ははっ。それから何か器用に割り切るような働き方を求められ続けてきたけどやっぱりできなかった。まあ、世間から見ればろくに仕事もできないクズってところが競争社会ってやつの中での僕の立ち位置。みんなと価値観が違うからどこで働いても例えるなら黒船扱い（笑）異文化は異質と取られていつも排除されていたかもしれない。そんでたどり着いたの井戸端で、介護がよいとかそんなじゃなくて本当に職安で検索して、たまたま見つけただけ。そこがスタートラインだったかな。

井戸端はボクのネガティブな部分から考えられている。『みんなでよいケアしよう！えいえいおー。』みたいなポジティブな発想じゃなくて、不器用でいろんなところを追い出されてきたボクが追い出されないようにするには、まずはボクが誰も追い出さないってこと。だから誰でも受け入れるし、排除もしない。そうしている限りはきっとボクは追い出されないだろうって思っている。よい介護してるねってこともよく言われるけどよいことをしようなんてあまり考えたことはなくて、できる限り残念なことは減らしたいと思っている。よいことっていっぱい考えつくけど、残念なことって数えるくらいしかないもんで、じゃー残念なことって何って言ったら『許されないこと』だと思う。現代の福祉ってみんな今

流行りのありの一まーの一じゃ許されない。きちんとしなさいって言われる。きちんと歩く、きちんと部屋を片付ける、きちんとお金を管理する、きちんと仕事をする、きちんと健康管理する、きちんと人間関係を保つ、そんな人が素晴らしい人で年寄りでも障害者でもこどもでも誰でも目指せて言われる、それが『自立』だと。まったくをもって余計なお世話だ。これ読んでる人にも部屋を片付けられないし、料理もまともにできないし、友達もないけど生活できている人っていっぱいと思うんだ。人それぞれ文化や暮らし方は違うんだから許してやればいいじゃん。最大数の最大幸福を基準にしちゃダメだって。それを正論にしている世の中じゃ一年で戦争以上の人が自ら死んでいったんだよ、そんなの健全な社会じゃないんだって。本当に面倒臭くて社会の問題となっているボケはじいちゃんばあちゃんなんかじゃない。今のままでオッケーなんて思っている「平和ボケ」した俺ら君らあんたたちなんだよ。

みんなが上手に生きれるわけじゃない。一生懸命に生きようとしてもなかなか上手くいかないもんでさ。でも上手く生きられなくても一生懸命ってことを認めてもらえなきゃ生きたくもなくなっちゃうよ。迂回してもいいじゃん、生きたいって思っているならさ。その生き方を可愛がらなくてもいいから邪見しないでやろうよ。そんだけで何とか生きていこうと思える人ってけっこういるもんだからさ。かわいそうだからって仲間に入れる必要もない、だからと言って独りにする必要もない「ひとりぼっちたち」ってところになれたらいいのかな。いくら少数派で仲間とか絆なんてもんを作っても手をつなげなきゃひとりぼっちだもん。何かごちゃっとそこにいるくらい場所がないと今の世の中は生きづらいって。最

後までまとまりのない脈絡だな、おい。でもこれがボクなんだろうと思う。言葉苦手だし、かつこいことも言えないし。でも言葉に苦しんでいる人って多いんじゃないかなー。言葉がたくさんできたが故に苦しむ人たち。言葉にカテゴライズされたり、されずに苦しんだり。言葉に頼りすぎるのは辞めたいよね。まあ、何だか良くわからないけど何か引っ掛かれ下手くそな言葉たち。

かとう まさひろ

宅老所井戸端げんき管理者、社会福祉士、介護福祉士。千葉県富津市生まれ。平々凡々に生きてたつもりだがいじめられてひとりぼっちに。10代でバンドに出会い救われる。パートはドラム、ちなみに同世代のバンドBUMP OF CHICKENが売れたのは自分が売れなかったお陰とポジティブに思い込んでる。生きづらい仲間たちと毎日サバイバルしている。

トークシリーズ 「迂回路をさぐる」から

井尻 貴子

トークシリーズ「迂回路をさぐる」は平成26年6月から10月にかけ、2週間に1回、計7回開催した、ゲストトークを中心としたトークイベントだ。

〈なにかに躓いたとき、あるいは障壁を感じたとき、ある表現行為や表現の場が、それでも歩きぬくための「迂回路」となるのではないか〉という仮説のもと、その先行事例研究として行った。

全7回のうち6回は、映画、ダンス、音楽、造形活動、雑誌編集など、アートの様々な手法を通じ、多様な現場で人と関わり合いながら活動を展開しているゲストによる事例報告を中心とした構成。最終回はゲストを呼ばず、過去6回のトークを踏まえ、参加者みなで「迂回路をさぐる」というテーマについて考える回とした。

本エッセイでは、この6回にわたるトークの内容を簡単に振り返り、続く第7回の対話をキーワードで整理して報告し、本トークシリーズの意義について考えてみたい。

まず第1回～第6回の内容を振り返ろう。

第1回は「自閉症の妹と向き合うための映像表現」。ゲストは映画『ちづる』監督の赤崎正和。映画制作にあたり、何気ない家族の日常やつながりを撮るなかで、“障害者”としてではなく、キャラクターをもった一人の人間としての妹が見えてきたという赤崎さん。自分のなかの差別意識や家族関係の変化、作品という〈表現〉が開く可能性について、飾らない言葉でお話くださった。

第2回は「対話の実験：とつとつダンス、劇団ティクバ+循環プロジェクト」。ゲストは

ダンサー／振付家の砂連尾理。障害のある人やお年寄り等とのワークショップなどを行い、大きなインパクトを与える作品を発表している。今回は、京都の舞鶴の特別養護老人ホームで行っている「とつとつダンスワークショップ」の話を中心にこれまでの活動について伺った。自分にとって未知の存在との出会いを繰り返した結果だというそれらの活動の展開そのものが、言葉とはまた違う、異なる者との対話の軌跡であるように思えた。

第3回は「多様な個性を活かす即興アンサンブル」。ゲストは「即興楽団UDje()」のナカガワエリ。障害のある弟の存在、その影響を受けつつ、いくつかの契機を経て、現在は音楽、身体表現などのパフォーマンスやワークショップを行っている。即興演奏から生まれる音楽だけではなく、ワークショップを通じて生まれる出来事そのものをアンサンブルと捉えたいという考えが印象的な回であった。

第4回は「精神科クリニックにおける造形活動の実践」。ゲストは精神保健福祉士の梅津正史。藝大出身の梅津が現在取り組む活動「Reborn部」は〈日記〉を核としたものだ。日記帳のフォーマットのみが統一されており、それぞれの方法で綴り、それを紹介し合う。さらに、それら個々に制作された日記が、ウェブサイト上でランダムに組み合わせたり、発信される、「Scrap of Reborn」。個と集団、内部と外部、日常と表現の間をつなぐ仕掛けに、〈迂回路〉を開く可能性を感じる現在進行形のユニークな活動であった。

第5回は「社会を楽しくする障害者メディアのつくりかた」。ゲストの里見喜久夫は、障害のある人の、主に就労を取り上げた雑誌「コトノネ」の編集長である。東日本大震災を契機として、自身が「コトノネ」を立ち上げるに至った経緯、そこで考えていることなどについてお話いただいた。その率直な言葉の端々に、世の中の価値観を転換させる考え方に会おうきっかけをつくる雑誌の背景にある、現実を見つめる眼差しを感じた。

第6回は「Living Together Lounge:ともに生きているということ」。ゲストはアーティストのアキラ・ザ・ハスラー。HIV／AIDSの陽性者の手記の朗読を組み込んだ音楽イベントLiving Together Loungeについて伺った。Live TogetherではなくLiving Togetherという考え方——共生社会をつくろうではなく、もう既に共に生きているという点に立ち、そこからどうやっていくかというふうに考え方を転換させることが非常に重要なのではないかという示唆を含む話だった。

では、これらの振り返りと共有からはじまった第7回は、どのような対話がなされたのか。参加者の発言を取り上げながら、報告したい。

まず、参加者自身は、どのような動機をもってこの場に参加し、個々のトークをどのように受け止めたのだろうか。ある参加者は次のように言う。

「今、世の中で、正道とされているというか、綺麗に整えられている道路を歩ける自信が自分にはないな、と思って。自分で何かを模索して、新しい回路をつくらないと、ちょっと生き延びるのが厳しいかなあみたいな実感が確かにあるんです。今回のトークシリー

ズのゲストの方たちは、たぶん、そういった違和感みたいなものを抱いて、何かやっているのではないか。お客さんもそういう方が来るのだとしたら、そういう場に行きたいと思って、参加しました」。

そして実際に参加し、「おもしろかった」。なかでも「やってる人でも、まだ迷ってるんだってことが感じられた。これがたった一つの道だ、みたいな感じではなくて、探りながらなんとか自分たちもやって、みたいな感じで話している方もいたのが印象的だった」と言う。そして、その姿に、自身の言葉で語られる活動や思考の変遷に触れたことは「自分の迂回路探しの一助に確実になった」と。

またほかの、現在福祉施設で働いている参加者は福祉に関わる分野の話でありながら、「全然福祉っぽくないのがいい」と感じたと言う。

「僕個人的には、どんどんいろんな人に、福祉のこととか知ってほしいなって思ってた。福祉の業界だけで頑張るんじゃないで、一般の人に知ってもらわないと、変わっていかないってずっと思ってたので。それで、たとえば里見さんが、それまではまったく興味なかったというので、でも、一発ドーンってきっかけがあれば変わるんだあって。そういう人って潜在的にいっぱいいるのかもしれないなと思って、すごく希望が湧きました。それに、里見さんはビジネスの世界で色んな力をつけてきて、その能力をこの分野でも発揮してくださっていて……自分はそういうのないなあって思って、やっぱりそういう、いろんな個性とか能力を持った人にこそ知ってもらいたいなあって思いましたね」。

こうした参加者と共に6回の内容を振り返るなか、見出されたのは、多様性、境界というキーワードだった。多様性という言葉は難しい。そもそも、多様性と言うとき、人は何を言い表そうとしているのだろうか。ある人は、「みんな違ってみんないい」というフレーズを多様性にとらえているという。確かに、互いのありよう、その違いを認め合う状況に、人は憧れ、多様性を見出すことがあるだろう。憧れ。それは、簡単に手に入る状況ことではないからこそ、抱くものだ。ある参加者はこう語った。

「多様性という言葉、僕も、なんとなく好きっていうか、みんなちがってみんないいみたいなのは、いいことだって思ってた、そういうのを目指したほうがいいんじゃないかって思ってた。だから、人を誰かが何かで括るのは嫌だなって。でもやっぱり、みんなで何かをするっていうのは、難しいのかなとも思う。何かするとか関わるとか、複数の人で何かやるってなったら、何か好きなこととか、居心地がいい感覚とかそういうのが、何か共有されていないと、散り散りになっちゃって、何もできないのかもしれない」。そこから、「だから、括ることもいいのかなって。ナカガワさんのトークをきいていて思った。でも同じもので括るのではなく、いろんなものを大雑把に、一緒に括ることがいいのかなって」思うに至ったと。

でもそのとき、そこに生まれる境界に何かもやもやしたものをを感じる者もいる。

「この辺の人、って括ったときに、そのなかでの多様性みたいなのは確かにあると思う」。

でも、「そうしたときに、その中というのがつくられることによって、その外の人、みたいなものが強烈にできちゃう。それは避けられないのかと考えるけど、それを避けると、やっぱり成り立たないように思う。その意味で、何か境界とか、溝みたいなことがすごく気になる。」

境界は、中と外をつくり、分ける。括られることの違和感を語る者もいる。一緒に括られた人に「色々な人がいても、ある人が私たちって名乗った途端に、私たちっていう一つのものになってしまうっていう」状況は避けられないのではないかと。

たとえば、女なんだから、世代だから、など〇〇で括られるとき、そこに自分の個を認められていないような心持ちになることは、確かに私にもある。

あるいは、こう考える者もいる。

「括ったなかに多様性があるという話に戻るけど、多様であるって、色んな違いのあるものがそこにあるっていうこと。違いを認めることは、その間に境界があるのを認めているってことだと思う。なので、括ることによって境界が生まれるのではなく、既に境界はあるんじゃないでしょうか。何かの内と外の境界っていうのもあるんですけど、実は、そこで多様性っていったときに、そのなかにもいっぱい境界があるように思う」。

多様性は、境界があるからこそ生まれる。多様であることに気づくのは、そこに境界や違いを意識しているから。しかしその境界が、一様であることを強い、多様であることを奪う状況もあるという指摘。多様性と境界の問題は絡まり合う。多様でありつつ、境界だらけの〈“私たち”の社会〉で生きる私たちの話は続いた。

第7回を経て。答えは出ない。急いで出すこともしない。先行事例から見識、視点、洞察を得ること、それがまだ問い、問われながら道をゆく途上であることを知り勇気もらい、ゆっくり考え続けられるしぶとさを身につけていくこと。トークシリーズのゲストトークと対話の意義は、ここにあるのではないだろうか。

多様性、境界、溝、巻き込む／巻き込まれる、迂回路……ここであがったキーワードはこの社会を生きるうえで確かに重要で、どれも簡単には答えが出ない問いに接続しているように思う。

それらを放り出して生きることは、いまの私には、できない。であれば、問いながら生きていくよりほかはない。私は私たちにはなれるけど、同時に私を奪いもし、いつまでたってもあなたにはなれない、という現実になれどしどし絡みついて、巻き込み、巻き込まれて生きていくために。

おわりに

『Journal 東京迂回路研究 1』——本書は、平成26年度「東京迂回路研究」事業で実施してきたことを、いま一度振り返り、そこで何が起こっていたのかを論じ、考えることを目的に制作した。

本書は、事業を総覧的に振り返る記録集という意図で制作されているわけではない。そのため附録を除いては、今年度行ってきたイベントをそのまま収録するという方法もとっていない。それは、私たちが本プロジェクトに、そして“研究”という営みに、境界線によって隔てられている何かと何かのあいだの関係の変容を促し、社会にありうる別の姿——すなわち、「迂回路」——を見出そうとしているからである。したがって、本書は「迂回路をさぐる」記録集ではなく、「迂回路をさぐる」旅路で出会い、対話し、考え、見出したことの記録集である。

まぎれもなく、迂回路をさぐる旅だった、と思う。そしてそれは、迂回路をつくり、あるいは見つけ、歩いてきた人との、出会いの旅だったとも言える。たくさんの、「強いられた言葉とは別の言葉で語り、表現している」方々に出会ってきた。その場におじゃまし、場の空気以身を浸し、そこでなされる思考を味わってきた。それらにときに、打ちのめされ、奮い立たされ、無能さを感じさせられ、勇気づけられ、歩いてきた。本書で私たちが「強いられた言葉とは別の言葉で語り、表現する」ことを試みることはできたのは、すべて、それらの出会いがあつてこそだと思う。

論考をまとめるにあたっては、そのような出会いを踏まえ、閉じられた思考に陥らぬよう、「もやもやフィールドワーク 報告と対話編」の参加者の言葉をたびたび思い返した。結果的にあの場で生み出されていた言葉の一つひとつに、多くのヒントが眠っていたことを想い、「対話型実践研究」の第一歩をさまざまな人々とともに歩んできたことをあらためて実感した。

「エッセイ：トークシリーズ「迂回路をさぐる」から」では、トークシリーズの内容を振り返るとともに、対話の肌触りを伝えることを試みた。ぼつりぼつりと話される言葉がまた言葉をよび、思考がゆっくりと積み重なっていく時間をぜひ感じていただきたい。

また、そのような「対話」の往還を誌面でも行いたいと考え、論考でとりあげた事例から、戸島大樹さん、藤めぐみさん、加藤正裕さんにコラムをお寄せいただいた。それぞれの現場や活動の運営でご多忙のなか、快く執筆をお引き受けくださったお三方に感謝する。読者のみなさまには、三者三様の文体、内容を通じて、調査先となった場それぞれの空気感まで味わっていただければ幸いである。また、今年度我々の訪問を受け入れてくださった調査先のみなさまに心よりお礼を申し上げたい。

本事業は多くのつながりのなかで生み出されている。共催団体として事業の展開をときに厳しくときにおおらかに見守ってくださった東京アートポイント計画の森司さん、芦部玲奈さん、坂本有理さんなくしてはこの事業は実施できなかった。事務所をおく港区芝界隈では、「芝三丁目場づくり研究所」の坂倉杏介さんや、「報告と対話編」の会場となった「芝の家」の加藤亮子さんに日々支えられてきた。事業イメージを魅力あるイラストにくださった宮田篤さん、シンプルかつ的確なウェブサイトを構築くださったLOCAL DESIGN LABの井手大さんの仕事に助けられた。本書の制作にあたっては、12月の寒い日に木更津で一緒に炬燵にあたり、場の空気にあたりながら、巻頭を飾る写真を撮影してくださった齋藤陽道さんにお世話になった。そして、本書デザインを含め、1年を通し私たちのまとまらない思考をデザインに落とし込んでくださったスタジオ・プントビルゴラの吉村雄大さんがいて初めて本事業はこのようなかたちをとることができた。今年度事業にご参加、ご協力くださったすべてのみなさまに多大な感謝を申し上げる。

今後も「迂回路」をキーワードにした旅は続く。本質的に言えば、旅は、終わらない。見つけ出した道を、言葉にし、定義付け、社会化することによって、必ず再びそれに対する排除や行き詰まりが生まれるだろう。そこでまた新たな「迂回路」を求める声があがるだろう。そのようななか、この営みを続けていった先には、どんな風景が見えるのだろうか。この研究所が、その風景に対して果たす役割は何なのだろうか。さまざまな言葉、さまざまな考え方を当てはめては突き崩し、何度も何度も、多様な人々との対話を通じて、歩きながら考えていきたい。

さあ、2年目。次年度は引き続き「迂回路」をさぐりつつ、これまでの旅路で出会ってきた人々や団体が相互に関係し合うプログラムを構築し、東京の「迂回路」をより多角的な視点で掘り起こしていきたいと考えている。その旅路にぜひまた、お付き合いいただきたい。

多様性と境界に関する対話と表現の研究所
長 津 結 一 郎、井 尻 貴 子、三 宅 博 子

[対話型実践研究]

もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編

東京都および近郊エリアの、医療・福祉施設、当事者団体、ケアに関わる団体等を訪問し、活動の参与観察や関係者への聞き取りを行う「調査編」と、その調査で得られた見解や視点を参加者と共有し、ともに話し合い考える「報告と対話編」から成る研究プロジェクト。調査・報告・対話のサイクルを通じ、さまざまな場を捉え直すことを試みた。調査編では、障害、ケア、労働、住処、ジェンダー・セクシュアリティ、都市と地方などを含む、幅広い領域から選定すること、多様性と境界に関する課題への取り組みがある種の表現として現れている場を選定することをこころがけた。

報告と対話編では、現場の参与観察と関係者への聞き取りから見出される問いを、社会に生きる「私たち」一人ひとりと関わりあう問いとして、現場に居合わせない人々と共有することを心がけた。

調査編

[調査先、調査年月日一覧]

- 医療法人社団光生会 平川病院 造形教室
(東京都・八王子市)／6月27日
- 慶福育児会 麻布乳児院 (東京都・港区)／6月30日
- 伊豆大島 元子おばちゃん家
(東京都・大島町)／9月4日ー5日
- RFC(レインボーフォスターケア) (全域)／9月8日
- 就労継続支援B型施設 Crazy Cats
(東京都・世田谷区)／7月31日、10月24日
- 宅老所 井戸端げんき (千葉県・木更津市)／11月29日
- 特定非営利活動法人 山友会
(東京都・台東区)／平成27年2月26日
- community center akta
(東京都・新宿区)／平成27年3月12日

報告と対話編

会場：芝の家 (東京都・港区)

第0回 6月12日

「生き抜くための〈迂回路〉とは何か」

第1回 7月10日

報告:精神科病院における造形活動について (ほか)
対話:哲学カフェ「生き抜くための〈表現〉とは」

第2回 8月7日

報告:日常の〈表現〉——乳児院の事例から
対話:哲学カフェ「生き抜くための〈表現〉とは その2」

第3回 9月11日

報告:人がつながる場——伊豆大島の事例から
対話:哲学カフェ「暮らす場所のえらびかた」

第4回 10月16日

報告:"家族"を考える
——LGBTの里親支援活動の事例から
対話:哲学カフェ「"家族になる"とは」

第5回 11月20日

報告:"社会参加"への道
——精神障害者就労支援施設の
ライブハウス運営から
対話:哲学カフェ「"社会参加"してますか？」

第6回 12月11日

報告:共にいること——ある宅老所の日常から
対話:哲学カフェ「ケアって何？」

[事例研究]

トークシリーズ「迂回路をさぐる」

会場：東京文化発信プロジェクトROOM302
(東京都・千代田区)

造形・音楽・映画・雑誌・演劇など、アートのさまざまな手法を通じて、病や障害を持つ人たちとの活動を展開している人をゲストに招き、活動についてお話しいただくトークシリーズ。ゲストトークに加え、参加者を交えた対話の時間を持った。対話を通じ、参加者それぞれが主体的にさまざまな背景を持つ人々が共に生きていく社会と、アートとの関わりについて考察を深めることを狙った。

第1回 6月18日

「自閉症の妹と向きあうための映像表現」
赤崎正和 (映画『ちづる』監督)

第2回 7月2日

「対話の実験:とつとつダンス、劇団ティクバ+循環プロジェクト」
砂連尾理 (ダンサー/振付家)

第3回 7月16日

「多様な個性を活かす即興アンサンブル」
ナカガワエリ (即興楽団UDje()) 主宰、
おどるボイスパフォーマー)

第4回 8月20日

「精神科クリニックにおける造形活動の実践」
梅津正史 (精神保健福祉士)

第5回 9月3日

「社会を楽しくする障害者メディアのつくりかた」
里見喜久夫 (雑誌『コトノネ』編集長)

第6回 9月17日

「Living Together Lounge:ともに生きているということ」
アキラ・ザ・ハスラー (アーティスト)

第7回 10月1日

「迂回路をさぐる」

[会議]

東京迂回路会議 一多様性と境界をめぐって

平成27年1月17日
会場：アーツ千代田3331 1Fコミュニティスペース
(東京都・千代田区)

「東京迂回路研究」の1年間の活動について報告、その問題意識を提示し、議論する会議。
パネル (対話や表現が生まれる場に
関わるパネリスト4人による、それぞれの活動紹介)と、パネルディスカッション「多様性と境界をめぐって」の2部構成により実施。

パネリスト:小山田徹、坂上香、鈴木励滋、長津結一郎
進行：井尻貴子

[活動報告・論考]

Journal 東京迂回路研究 1

平成27年3月発行

1年間の活動の報告と、論考をまとめたジャーナル。
第1号では、初年度の活動を経て導き出された「対話型実践研究」の手法とその様相を描き出し、さぐり出した「迂回路」とは何だったのかを浮かび上がらせる。



「東京迂回路会議」録

共有空間の開発——小っちゃな火を囲むプロジェクト、対話工房などから

小山田 徹

1 一つの解決方法では足りない

僕は「ダムタイプ」というパフォーマンスのグループを、80年代からやってました。このなかで、中心メンバーの一人がHIVに感染し、エイズを発症するという出来事がありました。当時は、エイズに関わる情報がまだあまりない時期だったので、メンバーや友人たちとさまざまな悲しみと模索をしました。それが90年代初頭ですね。

最初はエイズに関する、さまざまな社会問題を解決しようと思って、突っ走ってたんです。でも、解決ってできないんですね。一つの解決方法ですべての解決が行われるかというところではない。多様な、実践の積み重ねのなかでちょっとずつ改善されていくものであるという認識が強くなりました。

そこから、やっぱり自分たちがやるべきことは、そういう問題を対話し続けることや、対話する場を持ち続けること、そういう時間を生活に組み込んでいくことなんじゃないか、それが一番重要なんじゃないかと思うようになって。

この「共有空間」——とにかく人が集まって、何かを交換したり、出会ったり、社会に参画したりとか、社会そのものをつくっていく空間にシフトチェンジする形で、社会のさまざまな問題や喜びに対応する活動を始めました。

2 さまざまな共有空間について

実際、街中にさまざまな共有空間をつくることをしています。コミュニティカフェや屋台や小屋など——屋台や小屋は制度的につくるのが難しいのですが、アートプロジェクトだとつくれたりします。アートってずるいですよ（笑）。

小屋ってすごくロマンティックな響きがないですか（笑）？ なんか、いろんなものに使えるような気分があるんですね。用意された空間ではなくて、自分たちで獲得してつくっていけるような感覚というか。それで、大学などに、こういうところを拠点にして人が集まる場所をつくっています。いざつくってみると、学生たちは大喜びなんです。東日本大震災以降、ここの小屋を拠点に、学生たちのいろんな活動が起こりました。一緒に女川という地区に行き、住民の方々と協働事業もしています。たき火のプロジェクトもしています。共有空間といえば、たき火に敵うものの、なかなかないんです。太古の昔からある、長い歴史を持った共有空間で、世界最古、世界最小の、でも世界最強の、共有空間だと思っています。東日本大震災でも、さまざまな形でみなさん、たき火をして生き延びました。たき火をしていると、その周りがいつの間にか会議室になったり、お酒の場になったり、非常に無理のない共同性が立ち上がった

てくる。たき火にはそういう効果があるんだと思います。でも落ち着いて来ると、火気厳禁になる。たき火が出来なくなって、わざわざ会議室が設けられる。個別住居になると、さらに町中が火気厳禁になって、たき火をする機会が、もしくはふらっとみんなが集まる機会がなくなり、いい状態になります。女川地区でもたき火をすることが難しいので、迎え火、送り火という行事として、流された敷地で、それぞれがたき火をするプロジェクトにし、そこに外部から来られる方は誰でも入れるという形でやり始めました。今年で、もう3年目になります。

3 ブリコラージュ的生活

今日お話するのは、京都にあるお粥のお店の話です。これは実は私の義理の母の店なんですね。おばあちゃん一人で、お粥の店をやっています。唐突にお粥の店って言われてもなあと思うんだけど、＜一人で無理なくできる、一生の仕事としてできる何かを持つこと＞は、この世の中の多様性を考える上で必要な要素の一つだと思っています。各個人が、なんとかしてこの老後、もしくは一生を生き抜いていくために、というバリエーションとアイデアが盛り込めるかをいろいろ考えながら、僕らも実践しているところです。

この下敷きに、「ブリコラージュ的生活」という考え方があります。

「ブリコラージュ」という言葉は、文化人類学の言語です。日本語に翻訳しにくく、「器用手仕事」という言葉になっています。これは、「必要なものを、その辺にあるものでつくるという技術」のこと。冷蔵庫を開けて、そこにある残り物で、美味しいものを作る能力のことです。とんかつが食べたい！と思ってとんかつ屋さんに行くのではなくて、冷蔵庫の中の有り合わせのものを組み合わせて、よりよいものをつくる。例えば、ゴミを、ゴミという概念で見ない。それをゴミとして見なかった場合はどうなるのかということから始まっています。そのようなものに関わる感覚、能力、技術を、ブリコラージュ的能力と呼んでいます。それを生活に適用してみたらどうなるかというのがブリコラージュ的生活という考え方で、「自分たちの生活のまわりにあるさまざまな要素、条件などをさまざまに組みあわせて、よりよいものをつくること、新しい価値観の生活をつくりあげること」です。

4 お粥の店

お粥の店を始めたのは、私の義理の母——70代後半の、一人暮らしの女性がこれから生きていくうえで、何が必要かを考えたからです。

まずは、死ぬまでやることのあるのが一番大事かなと。毎日やることのある生活。でも、その労働にやりがいがないと、やっぱり辛い。何がやりがいになるかは人それぞれですが、どう考えてもそれは必要だなと。一人で生活するにしても、完全に孤立した一人の状態が延々続くという

ことはあり得ないんですね。それでは人間は壊れてしまいます。なので、他者との交わりも絶対必要であろうと。こういう必要であろうものを考え、さらに、どうやったら作れるのかを考えようと思います。

それに、既にある条件をいろいろ被せてみる。例えばおばあちゃんの場合は、実家に使用しなくなった飲食店の空間があった。でも、家事が不得意である。ということは、何かをやるにしてもシンプルじゃないと駄目。そういったことを本当に具体的に考えていく（笑）。

いろいろ調べたら、特別な保温鍋があり、玄米と水を入れて少し煮て、一晩置くとお粥ができることがわかった。これなら労働的にも無理がない。あとは副菜ですよ。副菜もお粥だと、ピリッとしたものが少量あれば満足感がある。少量なら、無農薬の素材にこだわっても値段が上がりません。なので、こういうお店になりました。ここのメニューは、全部手作りすることが可能なんです。例えば、私の母親は昔から自分たちで育てた無農薬の野菜でおいしい漬物をつくっています。それを提供することで、このお店に母親も参加していることになります。お味噌も手作りです。メニューを考えるなかで、そういうつながりがまたどんどん出てくる。皆のまわりにある関係から、ピックアップして組みあわせて何かをつくるっていうことが、具体的にしやすくなりました。

営業も、無理のない営業っていうのをしたらどうなるかと。だから不定期なんですよ。おばあちゃんの調子がよい時にオープンする。来て開いたらラッキーという営業（笑）。

やってみたら思いのほかいけるんですね。こういう形のお店を作って、ほどほどの営業っていうのをやると、実はそのほどほどっていうのが、あるオーラを出す。余裕というか、柔らかさというか、お客さまにも何かそのオーラを感じて、楽しんでくれる方が出てくる。そういう方は、気に入ってリピーターになってくださる。お客さまの方が、お店に寄り添ってくれる状態を、なんとか作りたいと思っていたら、本当にそういう状況ができてきて、お客さまにも沢山来ていただいて、今、義理の母は、元気です（笑）。

5 今日元気です

これが、何よりだと思っています。ガンガン儲けるではなくて、わりと元気であることを大事にする。「ほどほど」をね。これは、うちのおばあちゃんの例でしたが、労働が、こういう、それぞれの生活のなかでいろんなものを組みあわせて、いろんな発見をしていくところから、もう一度立ち上がらないかというのが、今願っていることです。

これから老後に向かってとかさまざまな病気とか、生活の状態がさらに多様化していくと思います。

そうになったら、自力でなんとか生き延びなきゃいけない。楽しみとか喜びまでは国家は面倒見てくれないんですよ。そこは自分たちで発明しないと。だからこそ、いろんなアイデアを持ち寄って、いろんなサンプルを吟味しながらそれぞれに合ったものをつくっていける世の中になっていけばいいなと願っています。

暴力のあとを共に生きるために——out of frame のささやかな試み

坂上 香

1 これまでの活動

映画「トークバック」は、「私たちが分断しているのは、私たちの『違い』そのものではない。『沈黙』である」という言葉で始まります。オードリー・ロードという詩人、アメリカ人の黒人でレズビアンでという、いろんなマイノリティ性を持った方の言葉です。今日は、この「分断」と「違い」、**「沈黙」**と言葉を意識しながら、どう暴力のあとを共に生きたらいいのか、そこに表現はどのように介するのかについてお話しします。

私はテレビの仕事を10年間し、その後大学の専任教員を経て、今はドキュメンタリー映画監督をしています。また、その母体として「out of frame」というNPOをしています。

テレビでは「暴力」についてのドキュメンタリー番組を、主に海外に取材し、制作してきました。

次に、「Lifers ライファーズ 終身刑を超えて」という映画をつくりました。カリフォルニア州の刑務所に服役する終身刑受刑者や、社会復帰後も「更生」に力を注ぐ元受刑者たちの姿を描いています。そこで、対話が非常に大切であること、でもトラウマが深刻であればあるほど言葉にならない、なかなかそこに行き着かないことに気がついたんですね。私が取材していた治療共同体は喋るだけではなく、音楽や演劇、詩といったありとあらゆる表現方法を使って

いて、そういうさまざまな表現が言語化に行き着くためにとても有用ということにも気がつきました。

その次につくったのが、「トークバック」という映画です。これは、アメリカのサンフランシスコにある、女性刑務所の中で始まった劇団「Medea Project」を中心に撮影しました。受刑者はマージナルな存在ですが、特に女性は、見えない存在としてひた隠しに隠されてきています。演劇という形を通して、彼女たちの声を表現しているところに惹かれ、撮影を開始しました。

2 暴力のあとを生きる——関係性における希望の回復

こういう一連の映像をつくるなかで感じたことは、「暴力のあとを生きることが本人にしかできない」ということです。けれども、その内容や方向性を左右するのは、関係性における希望の回復ではないかと思います。希望の回復は1人ではなかなか出来ない。だから、いろんな人間関係のなかで希望を回復していくことが重要になる。そこにおいて、表現がすごく重要な位置を占めると思うに至ったんです。

エンパワーメントとは、本来人に備わっている能力、可能性が奪われている場合に、その能力を取り戻していくことを指すと考えています。「本人自らが獲得するものであり、また獲得していくそのプロセスそのものでもあり、誰かのために、もし

くは誰かにされるものではない」と定義し、その上で、実は私自身も、ディスエンパワーされた、力を奪われた体験を持つ一人であると思います。私自身も暴力の被害に遭ったことがあり、それに十数年囚われていました。なんでこういう活動をしているのかっていったら原点はそこにあるわけです。今はもう、囚われてはいない。でも囚われていた時期がある。そして私自身が、表現を通して、エンパワーされてきた当事者でもある。エンパワーは他者との関係性において育まれることを私自らが実感してきていて、エンパワーメントを育む関係性をつくる必要があると思い、それによって異なるコミュニティをつなぐ活動をしています。

3 メディア 4 Youth

その一つが、NPO「out of frame」の「メディア 4 Youth」という活動です。

これは「生きづらさを抱えた女性たちと子どもの協働的表現プロジェクト」で、特に暴力の体験などからくる生きづらさに着目し、そういう人たちと表現をしています。セラピーとしてよりも、エンパワーメントに重きを置き、他者や社会とつながり合うために何かをつくったり表現したりすることを目指します。

まずは自宅を始め、その後当時勤めていた大学で文科省からの助成金を得てソーシャルメディアセンター

を立ち上げ、2年間活動しました。いまはノマド的に、その時々で場を変え小規模に展開しています。

「out of frame」は調整役で、関わっている団体としては、薬物依存症者のグループ、DVの被害者支援団体、杉並区の中高校生の居場所の3つがあります。この複数のコミュニティの間に、アーティストやカメラ、表現形態や上映といった活動、いくつかの団体のスタッフやボランティアなんかが入っていくと、つなぎ目になって、依存症者の団体と、DVの被害者支援の団体が自然に喋れるようになる。

行為や表現が入ることによって、自分が誰であるかということ言わなくても、明かさなくても、つながれるようになるんですね。

私たちは、セミクローズドとクローズドとオープンの3つを使い分けてワークショップや展示を行い、段階を踏んで、それぞれの団体がちょっとずつ開いたり、より広いところとつながっていったりする仕掛けをつくっています。

4 映画「トークバック」

映画「トークバック」は、映画化するまでが非常に大変で、8年かかりました。劇団「Medea Project」では、演劇をつくり演じることによって、受刑者たちが人生に意味を見出していき、物語を書き換えていくことをしています。それまでネガティブにしか思えなかったものが、ネガティブな体験も含めて今の自分が存在するというふうに書き換わっていく。

最初は刑務所の中でしたが、いろいろあって今は外に出て来て、HIV

に感染した女性たちと元受刑者が一緒に演劇をつくっています。

タイトルの「トークバック」は、口答えをするという意味で、あまり良い意味の英語ではないのですが、私たちは「もの申す」「声をあげる」と捉えなおしています。

映画にも出てきますが、演劇の最後に必ずトークバックセッションというのを持つんです。そこで、演技手だけではなくて、観客側からもトークバックしてくる、もの申してくることで、呼応し合う場が持たれています。それがすごく面白いなと思って。観る人と観られる人っていう境界線が崩れる。インタラクティブでタッチングなんですね。そういう表現形態って、私の周りにはなかなかないので、日本でも境界を越えることの大切さみたいなものを見せたいと思い、作りました。

制作過程で、ワークインプログレス試写というのを今回行いました。

普通、試写は出来上がったものを見ていただく。でも今回は、途中で皆さんに見ていただいて、それを映像に反映させています。

この映像には、薬物依存症の女性たちが沢山出て来ます。映画はアメリカが舞台で、日本の人たちは出られないけど、日本の彼女たちの見方みたいなものが反映させられたらすごく面白いんじゃないかと思って持ちかけたら、すぐのってきて、やらせて！って。普通、試写って観終わってから感想を言い合うんですけど、今回は休憩でお茶を飲んだり、煙草を吸いに行ったりするたびに「いやぁ実はさぁ」って、みんなが語り出す。面白かったのは、映画について語るんじゃなくて、自分を語るっ

ていうこと。彼女たちの、自分たちがどう見られているとか、どう見られたいとか、そういう思いもディスカッションで出てくるんです。

出来上がってからは、まさに「トークバック」でやっていた、観る側と観せる側の境界線を壊していくことを私もやりたいと思って、映画の上映だけでは終わらせず、トークセッションやワークショップ等と一緒にしています。そうすることで、みんなのストーリーが映画によって紡ぎ出される。カフェで、居酒屋で、病院で、回復施設で、ラジオで、大学で、海外の学会で、今、いろんなところで、町中で、トークバックみたいなことを、いままさにやっているところですよ。9ヶ月で、18劇場プラス32の自主上映会を行い、なるべく私も行くようにしています。

5 私たちをつなぐもの

最初に引用した、「私たちを分断しているのは、私たちの『違い』そのものではない。『沈黙』である」を、「私たちをつなぐのは、私たちそれぞれの『物語』であり、『語ること／呼応すること』であり、エンパワーメントである」と書き換えて終わりたいと思います。

課題は、何が「当事者」を、現場を、私たちを、沈黙させているのか。沈黙は、何を、どのように、阻んでいるのか。どうすれば、沈黙を破ることができるのか。新たな関係性と関係性づくりのアプローチっていうのはどんなものがあるのか。それを、私も考えたいし、映画を観た皆さんと一緒に考えて、新しいものをつくっていけたらと思っています。

場をつくる——カブカブの実践を通して

鈴木 励滋

1 地域作業所「カブカブ」

地域作業所「カブカブ」は、現在横浜に3か所あります。それぞれ20名弱が通っていて、計54名が利用しています。私は97年の開所当時から関わっていますが、もともと福祉でもなんでもないところからこの仕事に就きました。

地域作業所は障害がある人が日中通って活動する場所で、活動内容はかなり幅広く、作業所によって異なります。基本的には国や地方自治体の助成金で運営されています。

場づくりというのは作業所の要件ではないですが、私は作業所／障害福祉の事業所が、場づくり／地域での居場所づくりをもっとやったほうがよいと思っています。それはなぜかというようなことが今日の話の中心になります。

2 障害は関係のなかにある

障害についてはいろんな定義があると思いますが、よく言われるのは、機能や構造や姿かたちに違いがあるような障害や、何かができない／上手くできない／苦手だというようなことです。

私は大学ではずっと社会学を勉強していて、差別とかそういうことを考えていました。そのなかでご縁があって障害福祉の現場に来たときに思ったのは、違いがあることが不利

益になってしまうというのはなんだろうということです。それはずっと考えていて、今の段階では「障害ってというのは、人にではなくて、関係にあるのではないか」と思っています。

違いや得意・不得意それ自体ではなく、そのことで不利益を被るところこそが障害の正体じゃないか。では、何でそういうことが起こってしまうのかっていうと、関係において力の強い側、マジョリティ側の理屈に合わせなくちゃいけないので、多数派／主流派のやり方に合わせられない人が障害者と括られたり、出来ない人って言われたりしてしまうのではないか。人間はこうでなくちゃいけないっていう価値観があまりに狭いせいで生じる多数派側の理屈による「不具合」を、障害ってことにしてるんじゃないか。だからそういう関係とか、その根拠である価値観自体を変えていかないと、しんどさは変わっていかないんじゃないかいうことです。そして、多数派／主流派の人たちの狭い価値観のなかで頑張る続けなくちゃならない生き方だって、しんどさに満ちているのだとも思っています。

3 地域のなかで場所をつくる——誰もが排除されない場所

だからこそ、誰もが排除されない場所を地域のなかで作って行きたいと思っています。してあげる側／される側にくっきり分かれるのではな

く、誰にとっても誰かのために何かが出来る場所で、誰にとってもそのことによって居心地がよくなる、本当にお互い様のような場所です。

でも、想いはあってもなかなか地域でできないという自分もいます。私も17年前は、地域とのつながりも全然なくて何もできなかった。でも、とにかく一員として何ができるかを一生懸命考えて、実践していこうと。で実際に身体を地域で動かしているうちに、段々一員として見做されていくようになってきました。

4 カブカブの「働く」ということ

「カブカブ」の「働く」ということについてお話しします。うちは、喫茶店を中心にやっています。でも、喫茶というのはあくまでメンバー一人ひとりに面白さやすごさを発揮してもらうための手立てというか、仕掛けというか、舞台みたいなものだと考えています。

仕事としては、コーヒーを淹れたり洗い物をしたりっていう喫茶の当たり前の仕事があって、そこで出すお菓子も作っています。ものづくりとして、絵を描く人がいたり、洋裁をしている人がいたり。踊るっていうのもあります。ワークショップで身体を動かすこともします。閉じている身体をひらいて人と関われるようにしていく、そういうことが接客などにもすごく活かされます。

リサイクルバザーもやっています。

カブカブがあるのは、3人に一人が高齢者の団地の商店街です。お客さんは、そこのおじいちゃんおばあちゃんばかり。開店当初、そういう方に足を止めてもらうために始めたんです。今では、何か沢山あるから貰いに来てとか言われて取りに行くと、なんだかわからないけど電球換えていたりするようになりました(笑)。そういうようなことをしているなかで、地域の一員になっていくんですね。

他にもポスティング／チラシ配りの仕事もあります。これも顔を売るような作業で、地域／団地を回っていろんな人と挨拶をする。そのことで、お店に来てくれる人も出てきます。

5 毎日、上演——おもしろさで魅了していく

うちのメンバーでこだわりがある人がいて、「左利きのこどもに興味があるんですけど」ってすぐ言うんだけど、これは大体引きますね、お客さん。(笑)

実際、彼が以前通っていた作業所では禁止されていて、でもそれはこだわりだから、単に抑制された彼は感情をしばしば爆発させていたわけです。彼の理屈があるのに、世間一般の喫茶店のウェイターはそんなことをしないっていう理屈によって禁止をされていた。でもカブカブでは、それは接客だということにしました。人生経験豊富なじいちゃん、ばあちゃんはたくましいので、「ああ、わしらの頃は左利き多かった」とかって答えて、それをきっかけに話しが始まります。それはもう立派な接客じゃないかと思うのです。

一人ひとりの面白さ／すごさを、地域の人たちに楽しんでもらう。そうしたら接客として成立するんですね。なかには重度の人で、そこに寝てる人もいます。いわゆる世間では、そこにただただ言われるかもしれないけれど、その人に会いに来るお客さんがいて、いないと、あれ彼女どうしたのってなる。

ということは、その人が存在するっていうことを接客としてよいんじゃないかというのが、うちの喫茶店の考え方です。

私には、作業所という場所を使って毎日上演をしているという感覚があります。フィクション／作り物でも嘘でも、構わないと思っている。真面目に考えてがんじがらめになるよりも、結果、よい関係に少しずつなっていけばいいじゃないか。そのときにいろんな仕掛けが使えるんだったら使ったらいいと思っています。

理想がいくら正しくて素晴らしいものでも、その言葉や理屈で賛同してくれるのは一部の人です。そうではなくて、それは面白いねって感じてもらって魅了して、それはやりたいねっていう賛同者を増やしたいと思っています。

6 生き難さを緩めていく試み

カブカブは地域の皆さんに愛される店を目指しています。そこで関係が生まれるからです。他では散々否定されてきた人たちの想いと行動を、どこまで汲めるか。それを、働きとして成立させられるか。そういうことをあれこれ考えるのが私たちスタッフの仕事です。それを地域の

皆さんにプレゼン／「上演」して、メンバーそれぞれのすごさ——そのすごさは、学校などではあまり評価をされてこなかった部分かもしれないけれども私たちは面白いと思うことを、お客さまと一緒に面白がってもらう。それでお金をもらう。すべての仕事が表現なんですね。アートが上でリサイクルバザーが下で、なんてのはないんです。すべてがまわりの誰かとつながるための手立てで、誰かを魅了するための手立てだと思っています。だからその、この人たちのすごさを形にしたい、売りたいっていうのが、私たちのビジョンです。

誰もが居心地のよい場所をつくりたい。困ったら支え合えるようになりたいと思っています。

カブカブのメンバーだけを何とかしたいのではないし、うちだけで支えきれものでもないと思っています。でも、ひかりが丘というカブカブが活動している地域を、誰かが——それは障害に限らず、高齢者、こども、外国人、いろんな人が——困っていたら支えられる地域にしていったら、そしてそれが広がっていったら、結果的にすべてが覆われるようになる。そうしたらどんなことがあっても、私が駆けつけられなくても、うちのメンバーを含めた誰もが、きっと救われる。

それはまあ、つまり社会を変えていくという話ですが、目指しているのはそこです。やっていることは地味ですが、この、狭い価値観しか認められていない世の中に生きているなかで、誰もが持つ生きづらさ、生き難さを緩めていくことを、私たちはやりたいと思っています。

その前提には、自分に何ができるかがある。
余裕のある人だけが相手にされる。
それでいいのか。

「地域と一緒に」ではなく「地域で一緒に」

- ヴィジョンがあるのに何もできない自分
 - できないことはできる人に助けてもらうしかない
 - 「おせっかいとおたがいさま」
- ⇒ただ、「〇〇してください」ではなく、地域の一人として何ができるかを考えて、実践する
- 地域のしがらみに巻き込まれて困ったら
- ⇒ヴィジョンをだれもが嬉しいものに鍛えていく

長津結一郎

小山田徹

ディスカッション「多様性と境界をめぐって」

小山田 徹×坂上 香×鈴木 励滋×長津 結一郎×井尻 貴子

小山田 「迂回路」という言葉に行き着いてよかったよね。

いろんなこういう活動って、活動したり、組織をつくったり、助成金を出したりするなかで、それぞれの言語に縛られていくんですよね。それこそ迂回路を内在させながらスタートしないと、メインストリームにじんわりと取り込まれていく。経済的な制度とか、さまざまな文化的な制度に寄り添わないと助成金がまわってこないとか、表に出てこないとかメディアに載らないとか、いろんなことが作用して、いつの間にかそういうものに取り込まれていってしまうことがあります。逆に世の中のほうがのってくることもあって、今まで、フリンジだったものが、急にメインストリームに利用されていくこともある。

それに当事者として携わったり、現在進めたりしている人々は、常に、それとは違う流れを自分のなかに作っていかないと、どうしても振り回されていくんですよね。

そう考えたときに、そうした生き方自体が、迂回路と呼ばれる生き方ではないかと思います。社会のすべての人々が、大きなメインストリームに取り込まれないまま、それぞれの生活を立て、それぞれに生きていくために、さまざまな迂回路が大事なのではないかな。

そういう受け取り方で考えると、その迂回路自体も、メイン迂回路っていうのを発見したらそれはメイン

ストリームになっちゃうからね。そこで、何か一本の太い道みたいなものを作り上げることの危険性みたいなものもある。

だから、ほどほどで、寸止めで、眺めて楽しむっていうところからスタートして、多様に、拡散していくべきなんじゃないかなっていうのが、今思っている感じがな。

坂上 パネリストのお二人のお話を聞いて、すごく面白いなって思ったことがあります。最初、小山田さんがちょっと言った言葉なんですけど、「アートはずるいですよ」っていうその、ずるいのがいいな、ずるいことをもっと私たちはしなくちゃいけないなと思いました。そのずるさは言い換えると、したたかさでもありますよね。表向きによいこととか、社会でやるべき理念的なこととかのなかで収まるのではなくて、どれだけしたたかにやっていくのか。それは工夫や仕掛けでもあります。だから、そのずるさって、本質を突いている言葉だなと思いました。

それから鈴木さんのお話にあった、「価値観を変えないとしんどさは変わっていかない」というのは本当にその通りだと思います。

当事者と言われる人たち、私も含めてですが、実はすごくこの、メインストリームの、社会の考えにがんじがらめになっていて、何もできない自分とか、だらしのない自分、世間に迷惑をかけてる自分とかって自分

を卑下して、恥も感じている。こうあるべき姿っていうのにもものすごく囚われて、恥を感じたりしているんですよね。

今日、この赤い花を置いたのは、今、国会議事堂前でやっている、私たちの平和デモへの意思表示です。私はそこに居られなかったんです。でもね、すっごく嬉しいことがあって、さっき、携帯に、写真が一枚送られてきたんです。いま、そこにいる人たちからだったんですね。それが、3、4年前は本当に、宙をただぼーっと見つめてるような人たちだったんです。「メディア 4 Youth」にも来るんだけど、何が楽しくて来ているのかわからないような、無理やり連れて来られてるんじゃないかなって思うぐらいのこともあって、でもその人たちがどんどん変わってきたんです。

「トークバック」のある試写会のときに、ある人が「このトークバックに出てる女たちはみんな強いじゃないですか！ いろんな当事者は耐えてて、こんなね、声高に語れないですよ！」って言ったんですね。したら、5、60人いるなかで、ダルクの人が「はい」って手を上げて。それだけで、「うそっ？！」って思ったんだけど、さらにマイクを取り上げて、「私はそうは思いません！」って言ったんですよ。知らない人の前で。もうね、涙出て来ましたよね。そういう風に、その人の囚われからどんどん自由になって。その人が、写真のうちの一人だったんですね。

価値観を壊していく、囚われから自由になっていくっていうことのためにも、沢山の回路がある、一つだけじゃないんだっていうこと、それにどう出会っていけるか、出会わせていけるかっていうことが、すごく重要なことだと思います。舞台をしてるだけ、イベントをやっているだけではつながらない人たちもいっぱいいるわけで、そこをどう工夫していくかが、すごく問われている、私たちにも問われている、皆さんに問われていることなんじゃないかなと思いました。

鈴木 多様性という言葉も形骸化していきますよね。マジョリティから無邪気にマイノリティへ放つ「多様性が大切」なんて言葉は暴力ですらあります。だから、多様性って言うんであれば、それ相応の覚悟をして、言わなくてはいけないと思います。

迷惑をかけないように、立派な人間になるように、すごく頑張ってきた人がいっぱいいる。そういう人がまた、世間様に迷惑をかけないようにやってきたという自負があるからこそ、そうじゃない人に対して不寛容になるんですね。その不寛容さというのは、生き難さです。

飛び跳ねるとか、ちょっと他の人と違うようなことを言うとか、そんなことくらいで、なんで丸々存在否定されなくちゃならないんだ。立派な人間像に合わせていくために、な

んであんなに苦勞しなくちゃいけないんだと思うわけです。すごく苦勞していて、だからこそ返す刃で、人に対して不寛容な言葉を吐いてしまう。吐かせてしまったのは私、私たちなんですね。だから、当事者はもちろん全員なんです。こんな世の中を受け入れている、よしとしている、片棒を担いでいる私たちです。だからこそ、自分たちも生き難いんです。一度それを感じてしまったら、止まらないんですね。他者の生き難さも見えてきます。そうすると、なんでこの人たちこんなに苦しいんだろうって、この人たちっていうのはもう全員ですよ、会う人会う人。で、そう思うと、これはもう価値観を変えないと、というか拡げていかないと。こうでなくちゃいけないっていう人間像みたいなのを壊して、もっとこれだっていいじゃないっていう風に拡げていかないと、このしんどさはなくなるのではないかなと思うんです。

長津 今年度、この東京迂回路研究で開催したトークシリーズで、アキラ・ザ・ハスラーさんをゲストにお呼びした回がありました。そこで聞いた「Living Together」という言葉が、僕自身にとって、多様性と境界の問題をじっくりと考え直す言葉になりました。というのは、「Live Together」＝「これから一緒に生きていこう」じゃなくて、「Living Together」＝既に、進行形で、「もう



すでに一緒に生きている」じゃないかということです。

共生社会ということを考えたときに、これから共につくっていかうってよく考えがちなんですね。でも、そうじゃない。既に、多様なまここにいるんだから、このなかでどうにかしていく、ということなんじゃないか？ ということをアキラさんに提示いただいたと思ったんです。その言葉に出会えて、もう既に境界線はここにもあそこにもあるし、多様性もすでにあるんだあっていうことに、立ち返った気分でした。

小山田 ハスラーくんは、昔、「ダムタイプ」がエイズの問題をやっているときに、一緒に活動をしていたメンバーですが、なんかその時期を過ぎて、もともと、もともとしてるので、本当に嬉しいんですよ。いまでも、ヘイトスピーチに対しても、方法がなかなか見つからないなかで、七転八倒してる。それを持続しているっていうことが、ほんまに、いいなあと。

昔、エイズの問題をやっていたときに「Living with AIDS」という言葉があって、それはまさに、現在進行形であるという意味表示のもとに生きている人々を捉えようとすることうったんやけど、ちゃんと彼は、そういうものを、思考を続けてるんだと思うと、なんか、クッとくるよね(笑)。その、クッてくる感じを、いろんなところの、いろんな人々と、

いろんな方法で、キュッってこう、来合う関係を沢山もってたら、なんとか生き抜けるんちゃうかな。例えば、ハスラーくんがやってる活動に、僕はダイレクトに参加するわけではないんだけど、なんか、クッてくる、っていうところは、すごい大事なコネクションなんですよ。いろんな方法で、みんなが、いろいろ攻めてる感じ。で、その、いろんな方法というところがほんまに、迂回路なんかな、という感じを受けます。

井尻 そうですね。私たちも、今年度この迂回路研究という事業をスタートして、今日、こうした会議の場を設けていますが、この迂回路研究とまったく同じことをみんながやればよいとは思っていないんですね。ただ迂回路研究的なことを、みんなが出来たらよいのではないかと、とは思ってるんです。一人ひとりが、自分が生き抜くための道を模索する試みは、出来たほうがいい。それは、今、小山田さんがおっしゃってくださったような、一人ひとりがクッて反応して、自分も何かやってみようと思うとか、先ほど坂上さんが言ってくださったような、ずるさをちょっと持って、ちょっとしたたかになって生き抜こうと思うとかするなかで可能になっていく感じがします。

逃げることもずるいって言われちゃうことがあるかなと思いますが、一つの道を歩けなくなったときに、

逃げられなくてそこで折れちゃうのではなくて、やっぱり逃げる道を作ってほしいし、見つけてほしいっていうのがあって、こういう迂回路研究を行っています。

小山田 研究のひとつのあり方に、赤瀬川源平さんたちの、路上観察会、路上研究、みたいなものがあると思ってて。美術の運動ではなくて、何かこう見方をひろげる力はある、すっごく楽しそうなんですよ、おっちゃんたちが。ああいう姿には、妙な説得力があって、妙な浸透力があるんじゃないかなと思ってます。研究っていうのは、事業目的としては、非常によい迂回路だと思うよ(笑)。

それと、実際にこういうフィールドワークとか、一緒に歩くとか、覗きに行くとか、そういうものを繰り返すことは、実は喜びであると思う。対話ができたり、拒絶されたりを全部含めて喜びであり、その喜びの種類が沢山ある状態を、お互いに噛みしめあうっていうのが、素晴らしい研究なんじゃないかな。

井尻 「楽しそう」っていうことは、すごく大事だなと思っています。先ほどのお話にあった「カブカブ」には私も遊びに行きましたが、皆さん楽しそうなんですよ。そうすると、それが、障害という視点から見たときの問題行動であるかどうかということよりも、みんなその場において、

すごく楽しそうっていうことの方が、強い実感として残る。

鈴木 成立するかどうかっていうことをすごく意識しているんです。眉間にしわを寄せて、正しいから頑張らなくちゃいけないみたいな運動やってても、他者には響きませんよね。カブカブは、やっぱりそこが居心地よくて、一緒に過ごしたいと思うとか、つまりは僕が生きていきたいような空間、そういう地域とか社会を、少しでも形にしようとしているわけだから、自ずと楽しくなるかな。楽しいっていうのも、笑っているだけではない。深い部分で人が、やりとり、交通できるようなこと、すごく怒ってぶつかり合ったりすることもあると思います。人間らしいぶつかり合いができて、艱難辛苦あって、人間の人生は豊かなので。

井尻 そうですね、「トークバック」も、やっぱりその、人であるっていうことの魅力が、受け手にも伝わって、観た人も思わず何か話したくなってしまうのかと思いました。

坂上 でも難しいところもあって、やっぱり、みんながみんな、それをよしとはしてくれなくて、時々怒ってしまう人とかも出て来るんですね。特に、町で、真剣に活動しているような人が、「私はね、こういうことにならないように予防活動

しなくちゃいけないと思ってるのよ！だから私は、こういう活動やってるの！」って怒って出て行っちゃうとか。そういう価値観の対立みたいなことも、私の所に直接、バシッと来ることばかりではなくって、そう思って帰っちゃうとか、観に来ないとか、そういうこともたくさんあるので、そこにどう届けるか。その方法は、まだ編み出せてない状況……。だれか教えてください。

会場 (笑)

小山田 でも、イライラさせるのも、一つの、関係の作り方かなとは思。そういう方とも、その先に、また縁があると思い……。笑)。今この瞬間に、全員の人とつながるというのは無理ですよ。気長な方がよい。

坂上 そうですね。

小山田 「よい話ね」で、涙流してカタルシスで終わられちゃうのは、実は届いていないのかもしれないって思いますね。実は違和感を残すっていうことだって大事。メインストリームじゃないことをやっているのだとしたら、それは、違和感を抱かせるものですよ……。。

井尻 先ほど鈴木さんがおっしゃった、多様性という言葉を使うなら、それ相応の覚悟が必要だっていうのは、そこに通じる話かなと思いまし



た。

私たちも、対話という言葉も団体名として掲げていますが、対話というのは、共感を得るためのものではないです。対話を重ねれば重ねるほど、違いが見えてきますし、相手との差異やわかりあえなさ、そういったものに気づく作業でもあると思っています。そうしたときに、じゃあそこからどうやって生きるかっていうことを考えるんだというところまで覚悟してやっていかなければいけないことだと思っているんです。

小山田 今、女川で活動している団体は「対話工房」という名前です。最初は、失われたコミュニティをつくり、獲得し直すために「対話」というものが大事なんじゃないかと思って使ったんですよ。でも、そういう「対話」かまではわかっていなかった。実際にやり始めてみたら、「たき火の前でぼそぼそ喋る」なんですよね。それが一番よい対話でしょう。酒飲みながら、みんなが、自分の家の冷蔵庫から、美味しい魚とかいろんなもの持ってきては、シェアするんですよ。で、ぼそぼそと喋るんです。僕ら、外部から来た人間に一番残る言葉群っていうのは、何かそういう、ぼそぼそのなかにあるような気がしています。対話にすらも、今フィルターがかかっていて、どういう対話をしましょうかっていうので、対話のノウハウが出て

きていますよね。メモパッドにいろいろ書いて、それを貼り付けて、みんなで意見交換してとか、いろいろメソッドがあって。でも、それが本当に対話なのか。そんなものなしで、人類は今まで、十万年以上、対話を繰り返してきているとしたら、ぼそぼそ、っていうのも、対話ってものにちゃんと入れとかなあかんよね。ぼそぼそだと、けんか別れがないんですよ。お互い、上手にスルーしあってて(笑)。ほどほどに、届く言葉で、ぼそぼそと喋ってる。そういうのが誘発されるような、場所とか時間の流れ方とかが、実は、対話っていうものを支えてるんじゃないかな。

長津 「多様性と境界に関する対話と表現の研究所」という団体名に行き着いたんですが、多様性っていうことも、境界っていうことも、それから対話っていうことも、言葉にして形を定めてしまうと、どんどん陳腐なものになってしまう感じがします。これから先、今やっている形、今やっている考え方をいかに言葉にするかということをやり続ける一方で、その言葉をどうすり抜けて、別の形にしていったり、別の形を探っていくかということも、やり続けていかなきゃいけないんだと、改めて思いました。



パネリストプロフィール

小山田 徹

美術家、京都市立芸術大学教授

1961年生まれ。84年、大学在学中にパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。主に企画構成、舞台美術を担当し、国内外の公演に参加。90年より、さまざまな共有空間の開発を始める。2011年からは対話工房のメンバーとして、宮城県牡鹿郡女川町で失われた「表現と対話の場」を入々の日常に取り戻すために、現地の人と共に活動している。

坂上 香

ドキュメンタリー映像作家、NPO out of flame 代表

1965年生まれ。米国留学、南米放浪を経て、ピッツバーグ大学で社会経済開発学の修士号を取得。帰国後、TVドキュメンタリー制作に従事。以後、「暴力〈被害・加害〉の後をいかに生きるか」というテーマで取材を続けている。2004年、初の映画「Lifers ライファーズ 終身刑を越えて」を制作。最新作「トークバック 沈黙を破る女たち」の上映で、全国を行脚中。

鈴木 励 滋

地域作業所カブカブ 所長

1973年生まれ。97年、横浜市旭区「地域作業所カブカブ」開所、翌年ひかりが丘団地商店街への喫茶店オープンに携わる。以来、障害のある人たちの働く現場であり、地域の方たちが集う場の運営をとおし、さまざまな人がともにいられる場づくりを模索。舞台表現に関して『生きるための試行 エイブル・アートの実験』(フィルムアート社)や「月刊ローソンチケット」などにも寄稿。

東京迂回路研究

主催

東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、
特定非営利活動法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所

プロジェクトメンバー

長津結一郎、井尻貴子、三宅博子(NPO法人 多様性と境界に関する対話と表現の研究所)
森司、芦部玲奈、坂本有理(東京文化発信プロジェクト室)

JOURNAL 東京迂回路研究 1

監修 多様性と境界に関する対話と表現の研究所
執筆 長津結一郎、井尻貴子、三宅博子
編集 井尻貴子
協力 鈴木裕仁、松尾香織、若生帆波
撮影 齋藤陽道(P.1～P.9)、富田了平(P.72～P.78)
装幀 吉村雄大(スタジオ・ブントビルゴラ)
印刷 株式会社 シナノパブリッシングプレス

発行

平成27年3月15日
東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
TEL:03-5638-8800 FAX:03-5638-8811
http://www.bh-project.jp
「東京文化発信プロジェクト室」は、2015年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。

本書に関するお問合せ先

特定非営利活動法人 多様性と境界に関する対話と表現の研究所
〒105-0014 東京都港区芝3-30-1 山岸ビル2F
TEL:070-6437-3599 E-mail:info@diver-sion.org www.diver-sion.org

©特定非営利活動法人 多様性と境界に関する対話と表現の研究所
©東京文化発信プロジェクト室

